
世界を廻すモノ

青空白雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を廻すモノ

【Nコード】

N51040

【作者名】

青空白雲

【あらすじ】

魔法使い——空間制御の持ち主、神無一夜が、上空三千メートルに位置する土地で出逢ったのは記憶を喪った少女だった？

一夜はノアと少女に名前を付けて、共に生活していく。

自らの考えを最も大切に行っている不法侵入者——暗闇一縷はある能力に目覚めた。

それは闇の能力で……。

ソドム・アルテミスと出会い、能力の解除を目的に動き出す。

自動人形、魔法、記憶、魔力制御装置、心、カルマ、モレクスの

真意と目的、神無一夜と暗闇一縷、そしてノア、様々な謎が交錯し合い、収束していく。

神無一夜の一日は後輩に踏みつけられ、始まる

機械の駆動音が身体に染み込んでいく。

大木程もある巨大な円筒形のコンピュータ——魔力制御装置が動いている音だ。

円筒形のコンピュータに半ば無理やり埋め込まれたガラスの中に少女が浮かんでいた。

ガラスの中は水のように透明で、少し粘り気のある液体で満たされていた。

少年が命を賭けてでも助けたかった少女。その姿を見た瞬間、俯いてしまう。

噛み締めた唇からは血が流れていた。

滴り落ちた血は床に弾けた。

少女は困ったように眉根を寄せる。

少女の小さな唇が少年を元気づける為に動く。

それは液体に邪魔されて伝わらない、少年の表情も読み取れない。

少女の顔が悲痛に歪んだ。

少年はそんな少女の顔を見ていなかった。

うなだれたまま動かない。

本当に少女の為を思うなら顔を上げる。

そう思うのに動けない。

少女がどんな顔をしているのか、それを思うと動けなかった。

掌からぬめりとした気味の悪い汗が滲み出る。

……怖い。

何を言っべきなのかも分からない。

だけど。

このままで済ましていい筈がない。

勇気を限界まで絞り取る。

少年は魔王でも見るかのように決死の覚悟で顔を上げる。
視線を恐る恐る、少女に動かす。

ようやく見た少女の表情は、液体に誤魔化されて分からなかった。
無理やりに微笑んでいるのか、泣いているのか。

「……………ごめん……………」

少年は深く低く呟く。

液体が空気の震えを弾き返す。

声さえも、届かない。

それだけの事実、涙が零れ落ちそうになった。

それから、一言だけ、絶対に叶わない約束をした。

ぐにゅ、と顔面に重圧を感じて神無かみなしいちや一夜は目を覚ました。

顔面に足がある事にすぐ気づいた一夜は足を手で払う。

夢を見ていたような気もするが——完璧に忘れてしまった。

「あ、先輩起きちゃたんですか」

心底残念そうに言う少女の名前は伊沢波祠いざなみほいら。一夜の後輩である。

スラッとした肢体に見る者を魅了する美貌の持ち主だが、いかにせん性格が悪い。

今も先輩への尊敬の念も忘れて、顔面を踏みにじり笑っていたに違いない。

「ったく……テメエは毎回毎回、よく飽きねえな」

「まあ、私の趣味の一つですから。先輩を起こしに来るのも、それが理由にありますし」

にこりともしないで言う祠に『冗談』という文字は見えない。
思わず軽い目眩が起こる。

「矯正は不可能、か。まあいいや。パンでも焼いてくんねえ？ 俺は目玉焼きでも作るからさ。勿論、ベーコンをありで。お前は無しな」

トースターと漫画が数冊載っている卓袱台を指差して一夜は木製

の簡易ベッドから立ち上がる。

祠が朝に起こしに来る理由のもう一つ理由は朝食である。

親は隣りの地区である口ト地区に溢れているストリートチルドレンを保護する為に奔走しているらしく、祠は一夜の隣りの部屋に長い間、一人で暮らしているのだ。

そろそろ帰って来るんですよ、と笑顔で言った後輩と、

朝って何もやる気が起きないじゃないですか、と言って我が物顔で部屋に侵入してきた後輩を思い返す。

立ち上がった一夜は木製ベッドの縁に足を載せ——地震が起こった断層のように縁が真っ二つに割れた。

わっ！ と足場が崩壊した為、体制を崩し顔面が床と激突する。縁は百七十センチ、六十キロの一夜を支えきれなかったのだ。

「いつ、つあ……！？」

祠が、食パンをトースターに差し込んだ音がする。

顔をさすりながら起き上がる。

「先輩、何バカな事やってるんです？」

何の心配もしてくれない後輩からの非情な言葉。

「……」

「あ、先輩トースター壊れてますよ」

祠は一夜を見て言う。

「……はあ」

一夜は溜め息とも返答ともつかぬ声を出した。

暗闇一縷は不法侵入を試みる

暗闇一縷は繁華街を歩いていた。

一縷は、定年退職間際の刑事のようなよれよれの灰色のコートを着込み、傷だらけの黒い鞆を持っている。

春を感じる気持ちのいい風が一縷の身体を流れていく。

女性のように綺麗な髪がサラサラと風で靡き、抜き身の刀身のような鋭い瞳が小さく緩む。

電器屋のアーケードからはテレビが小さな音で流され、雑踏に掻き消される。

何かのアンケートを採っているのか、アーケードの前で色白の青年が用紙に何か書きながら、五十代くらいの男性に話しかけていた。五十代の男性から斜め後ろ二、三メートルの所に『ネットカフェ 近日オープン!』と書いてあるプラカードをやる気なさげに持っている三十代くらいの女性が居た。

女性は視線に気づいたのか、偶然なのか、一縷の顔を見て少しニヤき、それから顔をしかめた。

唇が動く。

『勿体無い』

一縷は、まだ何か言いたげな女の視線を無視して視線を別の方向に向ける。

会社に向かう自分の外見と同じくらいの——言い換えるなら二十代くらいのスリッ姿の社会人が居た。

社会人は寝不足気味の目を擦る。

社会人と、学生は凄いと一縷は思う。

金を貰う為、一時的な名誉、地位を求める為に会社に従属し、上司に媚びへつらう社会人。

社会に出た途端、使わなくなる数学の方程式、大昔の言葉、歴史を真面目に取り組む学生。社会に出る為に必要だと言う先生は即刻、

上司に気に入られる授業でもやった方がいい。

そういうしたくもない事に限られた人生のほぼ全てを埋められるのだ。

それらを疑問に思ってもそのまま流れて行く。

純粹に凄いと思う。

もしかしたら人間は自分は絶対に死なないという思いを持っているのかもしれない。

きっと、生きる為に、種を繁栄させる為にそういう装置が付いているのだ。

もしくは、来世の為に世の中を良くしているのかもしれない。

しかし、どれだけ科学が進もうが死んでしまうのだから、世の中を良くしようが悪くしようが意味がないような気もするが。

と。

肩に衝撃が来た事により、意識が現実世界に帰って来た。

下を見ると学生が居た。

自分がぶつかったのか、学生がぶつかったのかは知らないが、自分とぶつかったのはこの学生なのだろう。

「すみません」

学生が頭を下げてきた。

高校生だろう。色気も何もなく、変に髪が跳ねている。

寝癖だろうと見当をつける。

もしこれが、最近の流行とでも言うのなら若者はオシャレの意味を辞書で調べ直すべきだ。

真横に居た女学生が「何やってるんですか先輩」と辟易していた。こちらはしっかりと身嗜みを整えており、見る者を魅了する美貌を持っている。

化粧をしていない事に好感を持つ。

無視しないで謝った男子高校生にはもつと好感を持ったが。

一縷は二人を見比べて心の中で首を捻った。

二人の関係性がイマイチよく分からない。

そんな事を考えながら、一縷は言う。

「俺も悪かったよ、考え事してたし。悪かった」

男子高校生は、処世術としての愛想笑いを浮かべた。

「じゃあ、さようなら」

そう言つて、学生達と別れた。

繁華街を抜け、少し歩くと、全体的に灰色のアパートが視界の端にちらついた。

「ここにするか」

口内で呟いて、灰色のアパートに入つて行つた。

一縷は鍵穴を覗き込んで、呻く。

「オイオイ、今時ディスクリッターかよ」

素人でさえ、練習すれば針金で開錠出来てしまう玩具同然の鍵だ。泥棒からすれば、これほどやりやすい鍵はない。思わずプレートを見る。

一縷はいつものように鞆を開く。

中に入っているのはガム、透明な薄い板、ノートパソコン、ケーブル一束に割り箸、ピックとテンションだ。

ピックングの専用工具であるピックとテンションを差し込んで、鍵を開ける。

ガチャリ、と鍵を開いた音が聞こえた。

ドアを開けて部屋へ入る。

電灯が部屋を明るく照らしていた。

部屋の広さは割と小さい。

先日侵入した家の半分程だ。

一つの本棚にありつたけの本を詰め込んでおり、本の上に本が重なり合っている。

が、それでも足りない本が部屋に敷かれた絨毯に積まれてある。卓袱台が置かれており、その上にはパンを入れたままのトースターと漫画の本が五冊置いてある。

一番奥にベッドが置いてあった。

一メートル程上に窓があるが、日当たりが悪いらしく陽光が入ってきていない。

壁にどうにかして付けたのだろう木の板に持ち運び用のテレビと、教科書が置いてある。

部屋をもう二、三周見渡した一縷はこの部屋の宿主は学生であり、だらしない性格だと見当をつけた。

（電気を点けっ放しにし、パンを入れたまま出かけてるし……。

そのわりに本棚を一つにして、テレビを安い持ち運び用ので我慢する位には質素なんだよな……変な奴の部屋に忍び込んだよ）

バリバリと後頭部を搔きながら、トースターを起動させる。そのまま流れるように冷蔵庫へ向かい中身を確認。

賞味期限切れの物は纏めてゴミ箱に入れる。

流し台にあったフライパンを水洗いする。

（あんまり良いモンがなかったな）

今日の家は大ハズレだ、と一つため息を吐く。

暗闇一縷は不法侵入者だ。

泥棒とも言えるかもしれない。

しかしながら、人の物は奪わない。

それが、大切な物だった場合、一縷には責任がとれないからでもあるし、単純に人の物を奪うのは気分が悪いからでもある。

しかし、食べ物や電気代などは容赦なく食うし、使う。

別に一縷は正義感に溢れる若者ではないのだ。

世間のルールさえ破る不法侵入者だ。

とはいえ、自分で決めた信念^{ルール}くらいはある。

洗ったフライパンに冷蔵庫から取り出した卵とベーコンを手際よく入れて、目玉焼きを作り始めた。

漫画を卓袱台から絨毯にそつと下ろし、トースターが作動していない事に肩を落とす。

卓袱台に持ってきた持ち運び用のテレビをつける。コメンテーターが最近の経済状況について物知り顔で批判している所だった。

……どうせ死ぬのにムダな事をしてるモンだ。

俺も、このコメンテーターも。

そう、このコメンテーターも、暗闇一縷という存在も、いつかは生命の樹で『リセット』されるだけだというのに。

一縷の心の片隅にそんな考えが浮かんだ。

自分の装置は不良品なのかもしれないと、一縷は他人事のように思う。

一縷には人間が繁栄する為に必要であつた『欲』という物がほとんどないのだ。

失いたくない物と言えば、『自由』と『自分自身の考え』のみである。

だからこそ、社会に縛られない『不法侵入者』として生きていつているのだ。

『本能』『理性』『感情』『記憶』『演算』の塊である『心』が少し壊れているに違いない。

この場合は『本能』か、『感情』か。

一縷はそんな事を考えながら、パクリと冷たい食パンと温かい目玉焼きを口に詰める。

コメンテーターはまだ熱弁を振るっている。

こんな経済状況のお話なんて不法侵入者には何の関係もないし、

面白くもない。

どうせ死ぬのだとしても生きている間は楽しみたいという気持ちもある。

チャンネルを変えようとした所で、

コメンテーターの厚ぼったい唇が消えた。氷を熱風で溶かしたかのような不自然な消え方。

唇がなくなつた為、歯茎が剥き出しになる。気持ちの悪いピンクが目焼きつく。

「???あ?」

一縷は驚きに目を見開く。

食い入るように小さな画面を見る。

画面の中の人はその異常な出来事にどう対象していいか分からないのか、画面はコメンテーターのままだ。

コメンテーターはなくなった唇にようやく気づいたのか、唇があった場所へ手を伸ばす。

——絶叫。

そして、真夏に降った雪のように身体が溶けて、消えた。存在が消えた。

暗闇一縷は一拍置いて、生放送だったんだな、と場違いな事を考えた。

不法侵入者と家主とその接点

「先輩。何ですかコレ？」

魚肉ソーセージを両手で握り締めて、一夜に問いかける祠。

対して、一夜は魚肉ソーセージを頬張りながら、

「じゃあねえだろう？ トースター壊れてっから、冷たい食パンのまんまだし。……目玉焼きは作る気失せたし」

「作る気失せたって先輩のサボリ癖じゃないですか。だから、女子に人気ないんですよ先輩は」

言ってから諦めたのか、魚肉ソーセージを食べ始める。

祠の頬が少し緩んだ。

それを横目で見た一夜はただ、文句を言いたただけじゃねえのか
コイツ？ と勘ぐってみる。

「つか朝食が、魚肉ソーセージ一本って馬鹿じゃないですか？」

不満タラタラな祠の言葉を受け、冷蔵庫の中を覗く。

「あん？ あと五本あるけど？ それとも冷たいパン食うか？」

「数の問題じゃないんで、すっ！」

手近にあつた『今日からアナタもラッキーマン』というハウツー

(?) 本を勢いよくぶん投げた。

一夜はそれを受け止めると、

「まあ、別にいいじゃん。今日は記念すべき終業式なんだし。春っ
休み〜春っ休み〜」

変な節をつけながら歌う。

「キモイです先輩」

祠の辛辣な言葉が、槍となり一夜の心を貫いた。

祠がどこか満足げな笑顔を浮かべた。

一夜は『ツいてない奴』だ。

球技系のスポーツ観戦をしていると必ずボールが飛んで来たり、酷い時にはスパイクやバットが飛んきたりする。

街角を歩いていれば、歩いていれば、何の脈絡もなしに古びた看板が頭上に落ちてきたりするし、サディストな後輩には懐かれるしで（一度、祠に「お前つて何やかんやで俺の事好きだよなー」と言ったらボコボコにされた）、もはや世界が一夜を嫌っているのか思えない。

しかし、時間だけは一夜に対しても平等だ。

嫌な方向に考え過ぎると「実は俺だけ一日が一時間早いなんてねえよな？」なんて思う時があるが、多分、平等に過ぎているのだろう。

「こえー」

自分の想像に身震いしながら、終業式を終えた一夜は帰路につく。祠の両親が営んでいる灰色のアパートが視界に入ってきた。家賃がゼロ円（一夜と祠のみ）という最高の住まいである。

これは祠の両親が経営しているからだ。

家賃は払いますよ、と言ったことがあるのだが断られた。

アパートの右手に駐車場、左手にコインランドリーが設置されている。

因みに、これらも祠の両親が経営している。

一夜は駐車場を通り過ぎ、アパートに入って、自室の扉を開けた。自分のベッドに見ず知らずの青年が寝ていた。

「えあ？」

青年のその自然さ、ふてぶてしさから思わず、一夜は後ろへ一歩二歩。

表札を確認する。

合っていた。

しつかり、『神無』と表記されていた。
で。

室内にはふてぶてしく手足を大の字に投げ出して寝ている青年。
髪は絹のように綺麗であり、目鼻立ちがハッキリしている。

歳は二十代前半という所だろうか。

よくよく見ると朝、ぶつかった男の人だった。

「……つか目え開いてるんだけど。寝ながら目え開けてるんだけど……いや寝てんのか？」

一夜は少し悩んだ後、鞆をゆっくりと投擲。ベッドの割れた縁に当たった。

青年は身動きさえしない。

自然な寝息しか聞こえてこない。

「チツ。紛らわしいんだよ」

青年の近くまで歩いていき??立ち止まった。

そもそも、コレどう対処すればいいの？

「うゝん……」

数十秒悩んだ末、起こす事にした。

肩を揺らして声をかける。

「すんませゝん。起きてくれますか？」

何で下手に出てんだよ俺ゝ！　とか思いながらも愛想笑いを作ってしまう自分が憎い。

青年は鬱陶しそうに身動きしたあと、ゆっくりと瞼を開ける。

「ありや？　今何ふい？　体内時計的には十二時程だと思っくんらけど？　早退？」

余りにも落ち着き払った（というか危機感を抱いていないだけ？）
声に一瞬、目の前の青年が犯罪者じゃないような気さえしてくる。

「早退じゃねえよ！　つかテメエ……何？　空き巣、みたいなアレ？　泥棒？」

「いや不法侵入者……まあ、食いもん食っちゃったし。泥棒みたいなモンかもだけどな」

「……あゝ」

唐突に、一夜の脳裏に何かが過ぎった。

今日の夢の何か。

大事な、大切な、忘れちゃいけない約束、約束の、相手。

白昼夢のようなソレは、ハッキリとも見えなかったし、ぼんやりとも見えなかった。

漠然とした「あゝあの時、何て言っただろ？」と言った感覚に近い。

映像も音声もなく、ただ、漠然と思った。

少し不思議な感覚に捕らわれながらも一夜は目の前の不法侵入者に言う。

「とりあえず……まあ、帰れ」

「わかったよ」

青年はそう言っ、何かを取ろうとするかのように腕を振るった。直後。

腕から、黒い何かが生えた。

いや『黒』何て可愛らしいモノではない。

『闇』だ。

深淵に潜む闇?? 死を予言するかのような『闇』

「——え？」

「——あ？」

思考回路が断線したかのように空白が生まれる。

腕から生えた闇は鞭のように、卓袱台の下にあった鞆に巻きつく、無造作に青年に渡した。

それを見た一夜の心に大きな衝撃が走った。

自分の特別が失われ、同族が現れた。

緊張でカラカラになった喉を動かして言う。

「お前、まさか。俺と同じ……？」

青年はじつくりと、腕を観察すると、驚きの表情を緩和させ、言った。

「しかし、こんな力があるとはなあ。まあ、死ぬ訳じゃないしいいか」

むしろ便利じゃん、とも付け加えた。

「お気楽すぎねえ？」

気分を何とか落ち着かせようと、一夜がうんざりとした調子で言う。

と、

ヒョイト、青年がベッドから降りて歩き出した。

「あ、オイ！」

一夜が青年に制止の声をかけると、青年は思い出したように片手を上げて、

「じゃあな。俺の名前は暗闇一縷。鍵はディスクシンダーは止めといった方がいい。少し練習すれば誰にでも開けられるからな。お勧めはデインプルキーだな」

じゃあな、ごちそうさまでした、と言って暗闇一縷は去って行った。

「変なやろー……」

初めて自分と同じ奴に知り合えたのにマイペース過ぎる奴だったなあ、と一夜は思うのだった。

気持ちは十分に、落ち着いていた。

神無一夜は秒速一〇メートルで駆け上がる。

布団を頭から被って、持ち運び用のテレビを見ていた。

朝のニュースでコメンテーター、昼頃に囚人一人が消失したという事件があつたらしい。

人は死ぬと消失する。

心は身体を形作る魔力とは別の物質（だと言われている）が『生命の樹』から造られ、母胎にある身体に入っていく。

そこで、初めて『人間』は完成する。

そして長い時間をかけて心が容器から離れてしまい、人間は死に、身体が消失する。

身体が消失する原因は心が身体を形作っている大きな要因となっているかららしい。

テレビを見る限り、コメンテーターが消失した原因は何らかの原因で心がなくなったかららしい。

自信たっぷりと言ったふてぶてしい専門家の言葉を要約すると『原因不明』。

専門家が言つと分からなくても、解決したかのように聞こえるから困る。

「……」

そんなニュースを見ても好物のオムライスを食べてもあの青年のことがのっぺりとした黒い影のように心からこびりついて離れない。一夜はその黒い影を振り払うように思いつきり布団から飛び出た。生命の樹にでも行こう。

あの荘厳な景色を見ると何とも言い難い気持ちになる。一夜の最も気に入っている場所だ。

ジャンパーを羽織って部屋から飛び出した。

およそ、一〇キロ走り、森に入って手近な周りの木よりも頭一つ分大きな木に登ると、円柱の土地が遙か上空に伸びているのが見える。一年ほど前、標高三千二百メートルだとテレビ番組で言っていた。

ヘリコプターでも持っていないと到達できない場所——ヤハウエだ。

一夜は幹を蹴って、大きく跳躍。

一〇メートル程跳んでから、魔法を使う。

「空間制御」

ただただ、単純に、手足を動かすように、一夜は世界を変える。空間を捻じ曲げる。空気ではなく、空間を。

身体全てを、空間の歪みにより外部から見えないようにする。更に、空間を操り、足元に収縮させる。

空間を蹴りあげる。

空間を階段のように使う。

空間を自由自在に操る能力——それが一夜の魔法だ。

世界で唯一人、自分しか使えないと思っていたモノ。

とはいえ、こういうことくらいにしか使えないのだが。

目測にして、標高三千メートルに位置する土地へ駆けあがる。

五分後、生命の樹がある場所へと足を踏み入れた。

世界が変わったような漠然とした感覚。いつものことだ。

「寒み」

言葉と共に息が寒さで水滴に変わる。息が白く変わらない。

この土地には塵すらもない清浄な聖域なのだ。

生命の樹は凜とした佇まいでそこにいた。

全長一〇メートル、ピンクの葉をいつまでも鮮やかに咲かす神樹だ。
ついでに

生命の樹の所為なのか空間がエメラルドグリーンに見える。

一夜は生命の樹の根元を見る。

ここに、森で拾ってきた種を植えたのを思い出したのだ。
少女が居た。

生命の樹に背中を預けて眠っていた。
淡いピンクのワンピースを着ている。

「えあ？」

本日二度目。

思考が一瞬だけフリーズ。空間制御が切れた。

おかしい。

何故こんな所に人間が居る？

部屋に居るならまだ分かる。

でもこんなヘリでもない限り到達不可能な場所に居るなんて、ありえない。

もしかしたら、自分と同じ魔法使い？

よく観察しようと少女を意識的に見るが、白銀色の色の髪をクラゲのように振り撒いており、顔がよく見えない。

少し、懐かしさがよぎった。

何故そんなことを思ったのか考える意識に割り込みをかけるように、突然真下に大きな影が出た。

一夜が顔を上げると巨大なヘリコプターが飛んでいた。

えへら、と一夜の顔がどうしていいか分からずに、にやける。

「は、はは。俺って大馬鹿？」

一夜は自分の馬鹿さ加減に呆れる。

心がなくなつて騒いでいるのに、心をリサイクルする生命の樹にこない筈ないじゃないか、と。

見つからない内に帰ろうと一歩、歩み、止まった。

少女を見る。

ここに居るということは、世界全てに怪しまれるということだ。

コメンテーターの事件に係わつていようがいまいがそんなことは関係ない。

原因が直ぐに分かればいい。

しかし、分からなかった場合、居るといつ時点でもうアウト。心をなくすのは次は自分かも知れないのだ。

唯一の係わりとして手放す筈がない。

そしたら最悪、少女に自由は訪れないかもしれない。

ズキリ、一夜の良心が棘でも刺さったかのように痛みだした。

「ああーもう！」

力強く、一歩目を踏み出す。

足元が爆発したかのように地面が決れる。

へりは一夜達に気づかず、下降し続ける。

空間制御により姿を消す。

少女まであと、五メートル。

少女が見つかったが最後、世界中を敵に回すことになる。

汗が噴き出す。

「楽勝だっつうの！」

更に、一歩。

少女の背中に手を回す。少女の身体が消えた。

少女の身体は綿のように軽く、氷のように冷たかった。

一瞬、あそこでどれくらい眠っていたのか、考える。

「うしッ！」

少女を抱えたまま、二人はヤハウエから飛び降りた。

消失、落下、恐怖に女に、強制的出会い

「うーむ。まさか俺にこんな力があるとはなあ……」

ズズ……、とまるで空間を引き裂いて出てくるかのような闇を呑気な顔をして見る一縷。

繁華街を歩く人達がギョツとした顔で闇が噴出している掌を凝視するがパニックに陥ることはない。

どちらかと言うと手品を見ているような顔に近い。

どうなってるんだろう？　と言った興味津津な顔だ。

中にはその種を見破ってやる、と言った挑戦的な者もいる。

今の思考の沼に沈んだ一縷には周りのそんな状態に気づくことはない。

一縷は見た目よりは、深刻に（深刻と言ったモノでもないが）この事態を受け止めていた。

一縷が心配していることは、コメンテーターのように消失する可能性があるかも知れないということだ。

心配とは言え、「あーもしかしたら死ぬ可能性があるかもなあ。

それは嫌だなあ」と言っただけである。

絶対死ぬ、と言われた訳でもないのだ。

そこまで深刻に受け止める必要もないだろう。

それよりも気になるのはあの少年だ。

あの少年は「俺と同じだ」と言っていた。十中八九間違いなく、この力のことだろう。

あの少年は何者なのか……。

それを訊く前に飛び出したと言うことは内心錯乱状態だったのかもしれない。

一縷にだって、本能的な恐怖はあるのだ。

一縷は自分の住处への近道である路地裏に入ると。

「ちよおツツと、待ってええああああツツ！」

背後から誰かが叫んだ声が聞こえた。

声の高さから判断するに女だろう。

少女か、女性かは微妙な所だが。

一縷は更に突き進む。

そもそも一縷には『女友達』が一人だって居ない。

知人、と呼べるのは恐らく長年公共便所を『掃除してくれているおばちゃん』ただ一人である。

即ち、一縷を呼び止める女は皆無だ。

しかし、冷静になって考えると路地裏に居るのは一縷一人だ。

背後から、恐るべき間隔で足音が踏み鳴らされる。

……まさか、警察？

そんな考えに至った一縷は全力で逃げだし、真後ろを振り返り――
―地面が消え失せた。

「お？」

唐突な落下に背筋が凍る。

下にはドブのように汚い水が流れ、その水を挟むように通路がある。

闇がぶわっ、とネットのように広がり壁に突き刺さった。

一縷はネットに転がり込んだ後に、コレは自分が命令したのだと気づく。

目の前にボールが飛んできた時に、目を瞑るように無意識の内に命令したのだ。

闇が身体の中枢に浸食してくるような感覚に、自分が闇に吞まれそうに怖くなる。

自分が自分でなくなってしまうえば、一縷の最も失いたくない『自分自身の考え』がなくなってしまう。

闇が自分に感触や熱を伝えてくれる中で砂漠のように漠然とした恐怖の中にいた。

いや、実際に伝えてくれる訳ではなく、感触を『思い出す』とい

うような、おかしい感覚だ。

「……にしても何で地面がなくなっただよ。おかしい日だな、ま
ったく」

恐怖から逃れようと後頭部をガシガシと掻き毟る。

粉雪のようにフケが頭から舞って、一縷自身、少し引いた。

「何で逃げんのよ……がはっげほっ！」

女の声が真下からしたので、闇に穴を開けて見てみる。

あ？ と目を見開いた。

女がドブのような水にハマっていた——からではない。

女の左手。

水が嫌がるかのように女の左手を避けていたのだ。

「あははは。あんたもそんな能力あんのかよ……」

思わず乾いた笑いが起こった。

地面が消えたのはアンタの所為か。

名前はただの飾りです？

少女は余程疲れていたのか、一夜が部屋に着いてもまだ眠っていた。

……というか、眠っている少女を部屋に上げるなんて犯罪じゃないか？ とか思わなくもないが、仕方ない。

少女を背負いながら鍵を取り出し、あの不法侵入者を思い出しながら鍵を差し込み、ドアを開ける。

視線を部屋に巡らせ、誰も居ない事を確認し、部屋に入る。

一夜は少女をベッドに乗せて、布団を掛けてやる。
と。

少女の目がパツチリ開いた。

「うわっ！」

一夜は少し驚いて後退、そのままベッドの縁だった木片の欠片が足に刺さった。

鋭い痛みが走る。

「痛っ！」

足から欠片を抜いて、卓袱台に載せる。

横目で少女を見る。

意識のある少女をしっかりと見たのはコレが初めてだと思う。

少女は可愛い容姿をしていた。

いや、『可憐』と言った方がいいのかも知れない。

新雪のように白くて綺麗な肌に、太陽に晒される白銀の雪のような髪。

そして、大きな瞳。色は瑠璃色だ。

少女は一夜に訊く。

「あなたは誰？」

一夜は少しビクッと反応する。

まさか、あちら側から攻撃をしかけてくるとは思わなかったのだ。

「えっと……俺の名前は、神無一夜です」

一拍置いて、できる限り威圧感の与えない笑顔で、

「君の名前は？」

少女は、ちよつと首を傾げて、

「ない、かな……」

「ナイカナ？」

「えっと……というか、わたし、何にも覚えてなくて……」

少女は儚げな笑顔を浮かべて言う。

恐らくは気持ちとは裏返し表情を浮かべて。

理由は多分、心配して欲しくないからだと思う。一夜ならそうだ。
余計な同情心は欲しくない。

「ああ、そうなんだ……」

一夜は気が抜けたようにそう言うだけで精一杯だった。

少女の笑顔を見るのが、堪えられなくなつて本棚に視線を移す。

「お前さ、これからどうすんの？ 行き場とかある？」

我ながら馬鹿な事を訊いてるな、と思う。相手も、自分の答えも
一択しかないというのに。

上手に言い出せない自分がムカついて仕方がない。

少女は予想通り首をゆっくり横に振った。

そして、ぐつと、握り拳を突き出して言う。

「でも、一夜に迷惑かけるつもりはないから大丈夫」

予想外な言い分に一夜は驚くが、見知らぬ人に迷惑をかけたくな
いというのは分かる。

けれどコツチはそんな事情を考慮する気などサラサラない。

「いや、大丈夫じゃねえよ。三日で野垂れ死にするぞお前」

「でも、迷惑かける訳には……」

「お前が出て行ったら俺が罪悪感で死んじゃうから、迷惑なんかじ
やないし、どっちかという俺の方が助かる」

自分でも訳の分からない言い分に少女は目を白黒させるが、やが
て破顔した。

「えー。まずは当面の名前を決めたいと思います」

「ねー。コレって何なの？」

ガシャコンガシャコン、トースターのスイッチを押しまくる少女。

「それはトースター。止めて名前決めるぞ」

「えー？ 名前なんてなくてもいいよ面倒くさい」

少女は本当に面倒くさそうに横になって言う。

自分の名前だろーが、と呆れながら言い返す。

「あのなあ、俺が適当に決めるぞ」

「いいよ、別にそれで」

ひらひらと、手を振りながら答える。

ちよつと前の少女の面影は欠片もない。

そんな筈はないと思うが、この短期間に少女は一夜に信頼を置いてくれているのだろうか？

少女を見ながらそんなことを思う。

それに適当に決めると言われても、一夜にはネーミングセンスはない。

一夜少し思案して、言った。

「ノア……神無ノアでいいか？」

「いいよ。わたしの名前はノアってことで」

「お前、自分の名前だつてのに興味ねえんだな」

「うん。それよりわたしが倒れてた所って確か、すっごく高い所だったと思うんだけど」

一夜は思い返す。

少女が倒れていたあの場面を。

寒さで冷たくなっていた肌を。

「それがどうした？」

「一夜はどうやってここまでわたしを運んで来てくれたの？」

少女が起き上がり、真剣な顔で尋ねてきた。

横になったのは、この事を訊くタイミングでも考えるためだった

のかもしれない。

「俺の魔法でちよつとな」

腕を振って、空間を捻じ曲げる。

少し角度を調整し、腕を屋気楼のようにぼかす。

少女は驚き、好奇心一杯の顔で魔法の説明を求めてきた。

魔法<自称能力

女性は一縷の『泥棒技術の師匠』と同じくメツトリ地区の者なのか、太陽の光のように綺麗な金髪に宝石のような碧眼を持っている。

女はピクリとも動かない一縷を見て、言った。

「ちよつと助けてよ。……あなたに重大な情報があるし」

（ああ、助けろってことね）

「ほら」

と、一縷は手から闇の縄を形作り、女に投げる。

女は少し面倒くさそうな顔をしてから、

「私の『魔法』の所為でこれじゃあ上がれない」

「魔法？」

「……うん……」

女は説明するのが、面倒くさいのか左手で縄を掴んだ。

「ほら……、これ、あれ？」

女は困惑の表情を浮かべながら、左手で通路を触る。

通路のアスファルトはそれこそアイスののように溶けて、消えた。

女はもう一度、縄を掴んだ。今度は更に強く。

それでも闇で作り上げた縄は消えない。

「どうなってんのよこれ!？」

女はほとんど怒るように一縷に言う。

一縷は冷静な表情で、

「知らねえよ。そんなの。とにかく上がれよ」

一縷と女は人通りの少ない道路を歩いていた。

女は恥ずかしさで顔を真っ赤に染め上げて俯き歩く。

それはそうだろう。

服は水でグチャグチャに濡れそぼって、それこそ川で遊ぶ子供そのものの姿だ。

色気があるか、ないかだけしか違いはない。

女からは香水と水が入り混じった独特の匂いがし、妙に鼻につく最低の匂いへと化学変化している。

一縷はその女の横で、色気なんて全く感じていないのか、あざとさがない感じで空を見上げながら言う。

「あのさあ」

「何？」

不機嫌極まりない声で女が言う。

自分が地面を消してよく不機嫌になれるなあ、と一縷は八割感心、二割呆れる。

「あんたの名前、なんなんだ？」

「ソドム・アルテミス」

素っ気ない口調で女。

「あのさあ」

「何？」

やはり不機嫌極まりない声。

「何なのお前。俺に着いてくるし」

「科学者。あとあなたに着いてるのはあなたが私と同じような……魔法なのか、魔術なのか、それとも別の何かなのはよく分からないんだけど。まあ、そんな力を持っているから」

「ふーん」

ふーんと言いながらも明らかに説明不足な感じは否めなかった。

まあ、話を訊くのは一縷の住処である空き家……というより『廃屋』に着いてからでも遅くはないだろう。

一縷は歩道を逸れて、身体一つ入るのがやっとという広さの路地裏に入っていく、狭い路地裏にひしめき合っている建材の類をどかして器用に進んでいく。

「ちよつと待つてよ」

と言いながらアルテミスは慌てて建材をどかして、時には建材に服の繊維が絡めとられながら、不器用に進んでくる。

クスツと一縷は笑った。

「鼻で笑ったわね！ 今！」

「悪いな」

と、一縷は軽快に躲かし、歩く。

少し歩くと、狭い路地裏から少し開けた広場に出た。

そして、広場を通過し、別の路地裏に入る。

空を見ると視界の端に煙突が見えた。

何かの工場がこの近くにあるのだろう。

「これ、あんたの家に行ってるの？」

「暗闇一縷な。俺の名前」

一縷はアルテミスの問いを笑って避ける。

別に訊かれて嫌な事な訳でもないが、あれは明らかに家ではなく、廃屋なのだ。

『家』と自信を持って言うのは心苦しかった。

横手にある倉庫に飛び乗り、そこから思い切り跳んだ。

目の前に広がる光景は一縷の上昇と共に下に下がっていく。

林に、錆び付いた鉄の格子で補強された木の看板に『立ち入り禁止』の文字が書かれている。

ドドド、と水が落ちる音が耳に心地良く響く。

地に足をつけて着地。

アルテミスはまだ来ていない。

まあ、来なくても困らない訳だが、後ろを振り向いて確認する。

一縷の身長程の堀があり、今は働いていない工場が大きく構えている。

この世界は、十七区で構成されており、とても狭い。

そのため、地下空間などがよく使われているがやはり人間は地上で生活したい生き物らしく、土地が高騰状態にあるので、この工場はもうすぐ潰される筈だ。

塀に隠れるように倉庫がある筈だが、透視の能力は目覚めていないらしくただ、塀が見えるだけだった。

心弾む退屈な説明と食事のお誘い

「魔法つーのは、どっかの偉い科学者が言ったモノでさ。……世界は魔力が形作られてるって知ってるだろ？」

こくと頷くノア。

一夜はそれを確認して話を進める。

「それで、魔力は大なり小なり違いがある訳だ。俺とノアも少し、違う種類の魔力で作られてる。けど、炎や水と言った演算能力のない——まあ生物じゃない物は魔力が全く同じなんだ」

「魔法の話は？」

ノアは話が脇道に逸れたと思ったのか、不満そうに言う。

「必要な話なんだって。物語のクライマックス部分に必要な最初の話みたいにな。炎の話は蛇足だったけど」

ノアをそう言って宥めてから、再び話し始める。

「んで。自分の身体を自由自在に動かせるのは、生物の『演算能力』のおかげなんだよ」

ノアは退屈そうに、そして、いつになったら魔法の話に入るのかわくわくした表情で一夜の話を聴いている。

「で、科学者は人間の演算能力と人間の魔力の結合力、質なんかを調べた訳。百人くらい集めてな」

「ふんふん」

ノアは興味が湧いてきたのか、相づちを打つ。

一夜は少し気分がよくなり、しかしそれをノアに悟られないように声を弾ませないように気をつけながら、

「結果は完全に一致。ようするに、人間は人間の能力以上に運動神経を上げる事も出来ないし、頭がよくなる事もない。だから、目が見えない人は限界ギリギリまで、耳がよく聴こえたり、感覚が繊細になったりするのは当たり前なんだよ。演算能力の許容量が空くかな」

「ふーん」

「それで、科学者は仮説を立てた。例えば人間の演算能力を超えて、身体を形作る魔力の質が例えば——クラゲみたいに人間よりも演算力を使わない魔力に置き換わった場合、人間は周りのモノを操る能力を得るんじゃないかってな」

ノアは、少し悩むかのような顔をして宙を見つめる。

恐らく情報を整理しているのだろう。

やがて、ノアは疑問をぶつけてきた。

「人間の余った演算能力は運動神経とかにいかないの？」

待ってましたとばかりに、一夜は言う。

「魔力つつーのは、小さな粒なんだよ。それがくっ付いて、身体が出来てる」

心はよく分かんねーけどな、と一夜は少し微笑んでから言う。

「だから、生き物の中には魔力結合がスッゴい強い奴だっている。

でもな、魔力結合をそこまで堅くするには魔力の質つつーのがアラシク——つまり演算能力を一杯使わないといけないんだよ」

ノアが頷くのを確認してから、説明を続ける。

「演算能力が高ければ高い程、運動神経がよくなるのは間違いないんだけど、魔力の質つつーのも関わってくる。だから演算能力が無限にあつたとしても上限があるんだ。身体を守る為にリミッターもかけられてるしな。で、全ての能力が上限一杯になって尚、余った演算能力があれば、それは——周りに割り振られる。……いや正解に言えば、限界以上に身体を操れるんだよ」

「？ どういうこと？」

ノアが小首を傾げて言う。

「ようするに、身体を形作ってる魔力を小さい粒——分子レベルで操れるって事」

「なんでそれで今さっきみたいなのができるの？」

「分子レベルで操った魔力を炎の魔力と強制的に溶け込ませて、操るんだってよ。まあ、炎の質とかが変わっちまうらしいけど」

「一夜もそれで今みたいなことをしてたの？」

一夜はノアの問いかけによく分からないと言った。

「だって、全くもって意識してねえもんなあ。自分の手足を操るような感覚でさ」

グンニヤリ、と空間を曲げて言った。

それに伴うように同時にノアのお腹が鳴った。

「あー飯でも食いに行くか？」

「うん！」

一夜の呆れたような、苦笑混じりの問いにノアは純粹な笑顔で迎え撃った。

何だかんだで十分待った暗闇一縷

アルテミスを待つ事、十分。

「帰るか」

もうこれだけ待ったんだからいいだろ、と一縷は林に入っていくと、

「ちよつと、待ちなさいよ！」

アルテミスの声が聞こえた。

「充分待ったけど？」

面倒くさそうに振り向いて言い、一縷は少し驚き、眉を顰めた。

理由は、アルテミスの後ろにある筈の堀が綺麗に切り取られたようになくなっており、奥にある倉庫が土管のように丸く貫通していたからだ。

「お前の能力って何なんだよ？」

懐疑の目線を受け、アルテミスは不敵に笑って言う。

ゲシュタルト

「崩壊」

「崩壊？」

「あなたの言う能力の名前よ。あつた方がいいでしょ、やつぱり……
……ていうか大丈夫かな壊しちゃって」

アルテミスが少し不安そうに言う。

もしかしたら十分間も壊す壊さないで悩んでいたのかもしれない。
初対面の人間にあんなことをしたくせにこんなことで悩んでいたとは変な奴だ。

「良いんじゃないの。どうせ取り壊すんだろうし」

一縷は興味なさげにそれだけ言っ、林の中へ入って行った。無論、アルテミスも一縷に付いて行く。

「で。能力の説明についてなんだけどね。……私の左手に触ったモノはある一定の面積だけ消失するのよ」

なるほど、それであんな事ができた訳か、と一縷は一人納得する。

パズルの一部分が完成したような爽快感がある。あくまでも一部だけだ。

「原理とかは分かるのか？ そんな能力が目覚めたはいつだ？」

アルテミスは一瞬、何か心を静めるように？？あるいは何かを思案するように瞳を閉じて、

「こんな不思議なことができるのは魔法しか思い浮かばないわね」

「確定じゃないのか……」

「そうね」

「なら何にも分からないのか？」

「たった一つ分かっていることがある」

演出ではないだろうが、一拍だけ間を開けて口を開く。

「カルマ・モレクスが関わってる事は間違いないわ」

「カルマ・モレクスってあの、科学者か？ 空想上の魔術を無理やり理論化させた……」

言いながら一縷は一〇年前を思い出した。

師匠が居た頃の話だ。

一〇年前、あるカルト集団が居た。

世界は魔力によって動いているのだから、同じ魔力で動いている人に世界を動かせない筈はない。いつかは世界を操れるようになる。人間はその努力次第で神様になれると、豪語しており、山や海に籠もって修練を積んでいたらしい。

カルト集団はそれを魔術と名付けた。

それを聴いた世界はカルト集団を嘲笑したが、当時一八歳であったカルマ・モレクスはそれに興味を示し、魔術を憶測で理論化させたのだ。

憶測なので机上の空論というのが当て嵌まるかもしれない。

「無理やり、ね……」

くくつと、アルテミスは人を小馬鹿にしたように小さく笑う。

「違うのか？」

気を悪くさせた様子もない一縷が問う。

「違うわ。その空想上の魔術を理論化させた魔法を機械で実現させてしまったのよ。あの人は」

「機械で実現か」

「あれ？ あんまり驚かないのね」

少し不満そうに言うアルテミスは子供に見える。

いや、実際子供と言っているいい歳かも知れない。

「別に知らない事にいちいち驚いていたらキリがない。世界には自分の知っている事の方が圧倒的に少ないんだからな」

例えば、と一縷は歌うように言う。

「アルテミスの歳とか」

「……」

「俺は十八くらいだと思っただけど」

アルテミスは小さく溜め息を吐いて、

「当たり前。因みにあなたの歳は幾つな訳？」

「ん？」

一縷は目線を宙に漂わせて、えーとかあーとか無意味に言葉を繋げていく。

「あなた、覚えてないの？ 自分の歳」

「成人になるまでは数えてただけだな……。あー三十くらいだったか……」

「さんッ、三十ッ！？」

あまりの絶叫に、バサバサッと鳥が林から逃げて行き、一縷の鼓膜がビリビリと震える。

「……ッ！？」

一縷の声にならない声が拡散する。

「あなた、二十かそこらにしか見えないんだけど！ 私と同じくらいに見えたわ！ 詐欺よ詐欺！ 自首しなさい今すぐ！」

一縷は恐るべき速さで喋りまくるアルテミスを無視して、あまりの大声を聞いた所為か痒くなった耳の穴を掻く。

「ああー……ヘタすれば学生でも通用するんじゃないの？」

「そこまで若く見えるか？ 俺は自分では二十代前半くらいに見えるんだけどな」

「まあ、それでも見えるかもね」

アルテミスはそう言ってから、首を振る。

「あー違う違う。いつの間にか話が脱線してる」

とりあえず、とアルテミスは話を総括した。

「カルマ・モレクスなら何か分かるわ」

憂鬱な曇天と小さな太陽

一夜とノアは駅前のファミレスに向かう為に人混みの中へと身を投じた訳だが、繁華街はノアにとって、凄く好奇心を刺激される場所らしい。

「はあ……」

一夜は溜め息と共に電器店のアーケードに飾られているテレビにかじりついているノアをげんなりした目で見る。

曇天の空の中、唯一の太陽ですと主張しているかのような好奇心溢れる瞳でテレビを見ていた。

無表情のまま、ノアからテレビに視線を移すと去年に友達と見に行った『運命の約束』と言う映画が流れていた。

大ざっぱにあらすじを説明すると、前世から様々な苦難があり結びつかなかった二人が現世で、やはり様々な苦難を乗り越えて距離を詰めていくという、よくある恋愛映画である。

男友達と見に行く映画では絶対ない。

お話はハッピーエンドだった。

要するに二人は結ばれたのだ。

ふわり、と羽根が無意識の海から抜け出した直後、ガラスを割ったかのように弾けた。

ガラスは飴細工を熱したように溶けて消える。

脳裏に浮かんだのは『思い出せ』。

ハッ、と一夜の意識が急に戻った。

いつの間に意識が飛んだのか、羽根は幻覚だったのか、脳裏に浮かんだ映像だったのか、それとも別の何かなのかさえ判然としない。ただ。

真っ白の布に醤油を垂らしたように、心に『思い出せ』という言葉葉が染み込んでいくのを感じる。

「思い出せ」

思い出せ、思い出せ、そう繰り返して呟いてみたが、一向に思い出せない。

そもそも何を『思い出せ』と言うのか。
何気なく視線をノアに移す。

ノアはテレビの前で「へー」とか「ふーん」とか言っている。
と、

一夜の視線の端に物凄くノアを見ている店員さんが居た。
テレビへの執着に少し引いているのかもしれない。

とりあえず一夜はノアの肩を押して歩いていく。

テレビに後ろ髪を引かれているかのように一度後ろを振り返る。

「サッサとファミレス行くぞ。ノアだって腹減ってんだろ。あんなに腹鳴らして」

「ねえ」

ノアはテレビへの未練は断ち切ったのか、純粹な疑問の声を載せて言う。

「約束ってどういう意味？」

「……。お前の知識ってホントどうなってるの？」

「記憶喪失の弊害かも」

「約束は知らないくせに『弊害』を知ってるってのも変な話しだな」

「あと何で空って灰色なの？」

「あー。最悪な色だな。まあ、曇ってるからなあー。曇ってないと空はすげえ綺麗な青なんだぞ」

「へえー。見てみたいなあ。いつ見れるかな？」

「気象予報士だから分かんねえけど、明日辺りには晴れるんじゃないかねの？」

「明日、かあ……楽しみ」

「ああー！ 止めてその笑顔！ 明日も曇ってたら罪悪感で死ぬまする！」

「一緒に空見ようね」

あーもう止めてー！ と耳を塞ぐが、次の瞬間、何かに気づいた

ように耳を塞ぐ動作を止めて、

「そうそう、それが約束ってヤツだよ。一緒に空見ようとかさ。一緒に映画見ようとか」

「じゃあ約束だね」

この憂鬱な曇天を晴らすかのような笑顔だった。

二人の温度差

「家ってどういう意味だったわけ？」

「『廃屋』」

「絶対違う！」

そんなやりとりを思わずしてしまう程一縷の家？？廃屋は酷かった。

屋根は一部欠損しているし、木造の壁は所々剥がれ落ちている。色は全体的に木を腐らせたような嫌な色であり、心霊スポットとして紹介されそうな場所だ。

その廃屋の隣には澄んだ川がサラサラ流れている。

「ホントにここに住んでる訳？」

「ああ」

訝しそうに尋ねるアルテミスにしれつとした様子で答える一縷。アルテミスは廃屋に歩いていく一縷に衛生面は大丈夫でしょうね？と問いたくなる気持ちを抑えてついて行く。

ドアを開けるとそこは割と綺麗な部屋であり生活臭というものが全くない。拍子抜けだ。

この落胆にも似た気持ちは、意外にも別世界のように汚い部屋を楽しむにしていた証拠なのかもしれない。

真ん中に木製のテーブル、部屋の端にはドラム缶が寂しげに立っている。その直ぐ上に蛇口が取り付けられてある。

木製のテーブルには赤色のテーブルクロスと雑巾、ライター、新聞、鉛筆、雑誌が載っていた。

「まあ座れよ」

いつの間にか移動していた一縷が椅子を引きながら言う。

まず間違はなく一縷はここで住んでいない。

こんな所で住める者なんていないだろう。

しかし、掃除をしている所を見ると何かしら使っているに違いな

い。

（私をまだ信用している訳じゃないってことね。もしくは罠に掛けるつもりなのか……とにかく用心した方がいいわね）

と、アルテミスは甚だ見当違いの事を考える。

「ええ」

頷きながら、どこまで話すのかを心の中で算段する。

ここからが本番だ。

「あなた、その力を持っていたい？ それとも消したい？」

アルテミスは机の雑誌を横目で見ながら尋ねる。クロスワードパズルだ。

「どうでもいい」

一縷はやる気なさそうに頬杖をついて答える。

実際、この力に拘る理由もなければ消す理由もない。

アルテミスが欲しい、と言うのならばすぐさまあげようとも思える。

アルテミスは少し狼狽したかのように表情を変化させる。

「ああ、そうそう。重大な情報って何な訳？」

一縷はそう言えばそんな事言っていたなーと思い尋ねる。

「え、あつと……さっきの話と、能力を持ってるデメリット……まあ可能性なんだけどね……」

言いづらそうにじれったい間を開けてから、

「死ぬかもしれない」

そう言った。

名前が事実を語るとは限らない

「Aランチをお願いします」

「じゃあ、私もAランチで」

視線を店内全てに向けながら言うノア。

明らかにワクワクそわそわしている。

ファミレスに行った記憶すら失っているのだろつ。まあ、青空を忘れていくくらいなので対した驚きもない。

「ねえ……」

ノアが何か決心したように言う。

視線はメニューに固定されてある。

「んー？」

と、わざと気づかないフリをしながら本棚から目的の絵本を取ってくる。

「えーと……いや、これ食べてもいい？」

明らかに話題変更したのが伝わってくるが、やはりそれには気づかないフリをする一夜。

なんだそれ、とノアが指を指しているメニューを見る。

とってもお高いデザートだった。

誰が頼むんだよレベルの。

「ツツコミ待ち？」

言いながらテーブルに絵本を置く。

「『ノアの世界』？」

ノアが絵本のタイトルを読む。

「そ。ノアの名前の由来」

「好きなの？」

ノアは何気なくページをめくって言う。

「好きっていうか、有名な絵本なんだけどな」

一夜は言いながら内容を反芻する。

ノアという神様が、善人のみを救い出し、樂園で過ごすお話だ。
因みに取り残された悪人達は『善』という歯止めがなくなった為、
破滅した。

まあ、愉快なお話ではある。

「作者、神無零夜？」

ノアが一夜を見ながら、言う。そういえば名字が同じじゃない？
と言いたげな顔だ。

「まあな。俺の父親だよ。義理だけど」

「義理？」

小首を傾げながらノア。

「あー、本当の父親じゃねえつとこと」

「本当の父親は？」

ズバズバ、質問するなあ、と少し清々しく思いながら、微笑む。

こういう感じは嫌いじゃない。

「さあ？ 捨てられてたらしいから俺」

「私と一緒にだね」

共通点を見つけたからか、とても嬉しそうに笑う。

父親や、母親なんて関係なく、共通点だけを見たのかもしれない。
それが浄も不浄も飛び越えた存在に見えた。

それこそ、ノアの世界に出てくる神様よりも神様に近く見える。

ウエイトレスが来るまで一夜の過去のお話をする事にした。

別に話題は何でも良かったのだが、ノアが聞きたいと言うからだ。
一夜は、面白おかしくノアに喋った。

神無零夜は、絵本作家ではなく、旅人だと言う事、神無零夜の友人である伊沢波家に厄介になっていると言う事、生活する為にバイトをしていると言う事、その分部屋にはおおよそ学生らしくない部屋になっている言う事などだ。

喋ろうとして止めたのは自分がどれだけ部屋の電気を切り忘れて
いるか、だ。

「お待たせ致しました」

とウエイトレスがAランチを運んできたので一旦、話を中断する。
と、ウエイトレスが思いつ切りすつ転んだ。

ぶわっ、とAランチが宙を舞う。サラダが華麗に舞うがゆっくり
見える。

一夜は二つの食器を受け止めて、テーブルに置き、ウエイトレス
を抱き抱える。華麗に舞ったサラダが床に落ちた。

ゴツン、と室内に何重もの音が反響した。

「ふう……」

髪が鼻腔をくすぐる。整髪料の甘い匂いがする。

それに抱き抱えた身体は女性特有の柔らかさがあり、全体重を載せ
るように一夜に身体を寄せているにも関わらず重さをそんなに感じ
ない。

「え？」

…… 見ず知らずの俺に身体を寄せている？

そして、静寂に気づく。

不穩に思った一夜はウエイトレスの肩から、店内の様子を見た。
店内に居る人々は授業中に居眠りするように眠っていた。

いや、倒れていた。

「何だ、コレ？」

異常すぎる事態に心が大きく動揺する。

何だ…… コレ？

すつすつ、という呼吸音が一夜の耳元に届いた。

ウエイトレスの存在を思い出し、椅子に座らせた。

病気か何か？ 睡眠ガス？ 何だコレ？

「どうしたのかな？ みんな……」

ノアの戸惑いを含んだ声が静かな店内に響く。

その質問には答えられず、一夜は店内から外を見る。

店外に居る人々は、やはり店内と同じで、皆一様に眠るように倒れていた。そこはベッドじゃないですよ。そう伝えてあげたい。

と。

オートマタ
「自動人形ですがー！」

声が響き渡った。

人の声とは少し違う、機械の声だ。

『がー！』の所でノイズが走ったのだが、言葉として普通に聞き取れる。

壊れたラジオを想起させた。

それから、まだ無事な人が居る！ と気づき、一瞬の後、『オートマタ』という単語を発していたことに気づく。

(……オートマ???)

疑問が沸いた直後、機械の声でありながら、愉しげな様子が伝わる声で、

「神無一夜さーん！」

(え……?)

思考回路が切断された。

一夜にこんな知り合いは、勿論、居ない。

先行き不透明な二人

死ぬかもしれないと言ったアルテミスに一縷はふむ、と一つ頷いて、独り言のように言った。

「生者必死……」

「何それ？」

呆れより、驚きよりも、まず尋ねた。

少しは一縷に免疫がついてきたのかもしれない。

「生きてる奴は必ず死ぬって意味」

「そんな言葉あったっけ？」

「今考えみた」

「あ、そう」

未だに一縷の性格が掴めないな、と何故か悔しく思う。

「ま、そういう訳だから俺はどうでもいいよ。意味ない事には関わり合いになりたくない。どうせ一筋縄じゃないんだろ？」

手をひらひらさせて言う。

お見通しだった訳ね、と心の中で思う。あれだけ色々言っただけじゃない方がおかしいだろうけど。

「死んでもいいの？」

確認するように尋ねる。

「いい。どうせ死ぬんだし。『生きる』なんてただの延命行為なんだから」

一縷は事もなげに平然と言う。

延命行為、という言葉に『ああ、やっぱり生き物は死ぬんだな』とアルテミスは再確認させられた気持ちになる。

もう一縷はアルテミスに手伝うことはないだろう。

しかし、一応最後まで形式的に説明を続けようと思う。心変わりするかもしれないし。

そして、一縷の心を最も動かす言葉を口にする。

「それに、心を失ったり、自分の性格が改変されるかもしれない」
言った瞬間、一縷が椅子を押し倒し、勢いよく立ち上がった。う
わっと、アルテミスは一縷に聞こえない声で悲鳴を上げる。

「詳しく教えてくれ!!!」

「ええ……ッ？ どこにそこまで食い付いたの!？」

「私達二人が魔法を使っていると過程して」

アルテミスはテーブルにあった鉛筆を拾って、手の上でクルクル
廻す。

「過程して？」

一縷は、アルテミスの瞳を真剣な顔で覗き込んで聞く。

獲物を狙う獣のような瞳が、一言たりとも聞き逃さん、と語って
いるのが少し怖い。

「魔法っていうのはぶっちゃけた話、身体をバラバラに分解して物
質に転移する訳」

一縷の視線から逃れるようにクロスワードパズルの一行目の問題
を目で追う。

『コレを捨てて去っていく人も居る』と書いてある。

「崩壊の能力は物質に転移して、粉々に碎き割ってるってことか」

「まあそういうことね。魔力単位で分解してる」

綺麗な字で『タバコ』と書いた。

一縷はアルテミスの答えを見て、

「でも何で左腕がなくなったりしないんだ？ 身体をバラバラに分
解するんだらう？」

「あんた、身体を形作ってる魔力の数って幾つか知ってる？ 五十
兆個よ。生き物の中で世界最多。身体をバラバラに分解するって言
っても人間の目にはそんなの見えないわ」

一縷はアルテミスの掌に収まっている鉛筆を優しく取る。

アルテミスは少し、慌てたように、なっ！？　とか言っているが、気にせず一縷は先程アルテミスが書いた答えを裏側の消しゴムで消す。

「あれか、砂漠の表面の砂だけ使って魔法を発動するみたいなものか。見た目は対して変わらない。というより、わからない」

「何で消す訳？」

一縷のたとえ話を無視して言う。

「間違ってる」

一縷は『タバコ』とまだ黒く残っている字の上に『セリフ』と答えを書いた。

「うっ……………」

と、顔を真っ赤に染めるアルテミス。

「あーあ、濡れっぱなしでいるから熱出てんじゃねえか。顔赤いぞ」

一縷はそう言って、数秒間悩んだ後、

「ほら、雑巾」

テーブルの上にある雑巾を手にとって渡した。

「雑巾で拭けって言う訳！？」

「俺は毎回これで拭いてるけど？」

「汚いっ！……………ていうか、一縷って口調コロコロ変わるよね。シ

リアスモードとコメディモードを使いわけてんの？」

一縷は、ふむ、と考えて、

「いや、気づかなかったな。二重人格かもしれない」

とシリアスモードで首を振る。

「……………あ、そう」

「風呂はあのドラム缶だけど……………水しか出ねえから更に風邪ひくだろうしな」

「春だしね」

ふわー、と一縷は軽くあくびをする。

「よし。カルマⅡモレクスに会いに行く前に銭湯に行く？　俺は金ねえけど」

「あんたのやる気のツボが全くわからないんだけど」

一縷は、ドアを開けて土を踏む。

「俺の最も失いたくないモノは自分の考えだ」

命には興味を示さなかったクセに心には執着するのか。本格的に変な奴だ、とアルテミスは思う。

けれど。

こんな奴が執着するこそ、失ったらいけないモノのように思えた。一縷には一縷にしか見えない大切なモノが真っ直ぐに見えているのだろう。

他人にはそれが命よりも価値のあるモノだと分かるのかは知らないが。

「まあ、とりあえず銭湯は賛成ね」

左手でジーンズから財布を取り出して、硬貨を一縷に向かって投げた。

綺麗な放物線を描く硬貨を一縷は片手で受け止める。

「ま、依頼料つてことで」

アルテミスは、笑顔を見せて言った。

自動人形は言われたままに実行する

「ノアさんもいらつしやいますね〜?」

繁華街中に響くその丁寧な口調で紡がれる言葉に、切断された一夜の思考回路は弾かれるように反応した。

——ノア?

一夜はノアと目配せした後、自動ドアが開くのももどかしく、外へ飛び出していく。

「あ! できましたね?」

と、裏路地からコチラを見る自動人形。真横には倒れている人。帽子を深めに被り、その上に手を添えている。顔は見えない。血のように真っ赤なブレザーを着ている。

(あれが、オート、マタ? 人、だよな……?)

人間特有の雰囲気ではないように感じる。
存在感が在りすぎる。

まるで、砂漠に水で作られた柱が立っているかのような。

『異質』 そんな言葉がピタリと当てはまる。

さつきだつて声よりも先に気配で裏路地に目が行った気がする。

「ノアさんを渡して頂きたく参上致しました」

言っている本人は鼻に指を突っ込んでいる。言動と行動が伴っていない。

(……ノアさんを渡して頂きたく? 何で名前を知ってる? 全部見られていたのか?)

一夜は思考を回転させる。

「お前、何でノアの名前を知ってるんだ?」

「インプットしたのは製造者なので。製造者が何らかの方法で知ったんじゃないでしょうか?」

インプット、と製造者、印象的な単語が二語。

この二つから連想されるモノはロボット——即ち機械だ。

だけど、人間以上に気配があるオートマタ（と、奴は言っていた）はロボットにはとても見えない。

「ロボット、じゃねえだろ？」

「いえ。自動人形というのは所謂ロボットです」

ごそつと鼻から埃を取り出し言う。

その所作に、諦めに似た感情が一夜の心に漫然と広まっていく。

メイドロボ、何てモノが売られている時代だ。コイツがロボットであってもおかしくはない。

「まあ、ノアさんや一夜さんの方に近いかもしれませんが」

どういう事だよ、と一夜が訊く前にノアが、訊いた。

「何で私を連れて行きたいの？」

「ご質問も製造者の方にお願ひします。と。言いたい所ですが、お答え致しますよう」

スツと、極普通に足を踏み出した。

一夜とノアに近づく為に自動人形は前に歩く。

二歩。

三歩。

歩く速度が上がっていく。

——どうする！？

安全の保障もないまま、近づけさせるのか？ でも、いや、もしかしたら——。

一夜の思考は空回りし、そして、自動人形はノアと一夜の眼前に迫っていた。

自動人形は迷える信者に救いを与える教祖様のようにノアに手を差し伸べて、こう言った。

「世界を変える為に、ですよ」

「世界を……って何？」

ノアはきょとん、とした表情で自動人形に目を向ける。

そこで一夜は、通行人の安否が気になった。ウエイトレスは無事だったが、ウエイトレスが特別だっただけかもしれない。

敏感に神経を尖らせ、通行人の脈拍を調べながら自動人形に視線をやった。脈はある。

「さあ？ 晴天へと導くか、崩壊へと導くかは分かりません。ノアさんをお連れしてから訊くつもりですが……」

そして、独り言のように緩やかに言った。

「素直に答えてくれますかね？ あの人は」

訊くことが多すぎる、と一夜は思った。

あの人。世界を変える。ノア。自動人形の製造者（おそらくはあの人と同一人物）。何故、人が倒れているのか。何故、自分達だけが無事なのか。自動人形と俺達が近いという意味。

そして、今までの言動から自動人形はほとんど情報を持っていない。

「お前の製造者って誰だ？」

はい？ と人間らしく、首を捻ってから笑顔を見せる。

「カルマ・モレクスですよ。世界最高の科学者だと言われてる人です」

自動人形はシャボン玉が割れるように唐突に動いた。

「一夜ッー！」

ノアが叫ぶ。

普通の人間なら、自動人形がブレたように見えたかもしれない。

それ程の速度で、一夜の顔を殴った。

一夜は瞳を瞑る事しかできず、人形のように吹き飛び、二十メートル後方のビルの玄関を突き破った。

静寂な繁華街にガラスの碎け散る音が響き、そして、

「ん？ 避けませんでした？」

予想外だ、とでも言いたげな様子で自動人形は首を傾げた。

そして、右側に居たノアを満足げに見て言った。

「でも、ノアさんは流石ですね」

ノアは顔を青ざめさせ、呼吸が震えている。自動人形の声など届いていない。

「いち、や……」

声が震える。

ノアは自分の声が発火材料となり、感情が火に油を撒き散らしたように爆発した。

「一夜ッ！！ 一夜ぁッ！」

今の一撃は普通の人間なら即死レベル。

隣りに居る自動人形など忘れ去っていた。

心が真っ暗に塗り潰されていくのを感じる。

「んな、泣きそうな声だすなよ。なんか悲しくなるだろうが」

小さな声が空気を伝ってノアの耳を打つ。

真っ暗な心を晴らすように玄関から無傷で一夜が出て来た。

服はボロボロになっているが、どうやら無事らしい。

「一夜っ！」

ノアは安堵で涙目になりながら、一夜に走り寄ろうとし、

「避ける！」

一夜は叫んだ。

ノアの足元にあるアスファルトが軟体生物のようにグニヤリと動いて見せたのだ。

「え？」

ノアは『一夜が大声を上げた為』立ち止まってしまった。

その足元からアスファルトがムチのように柔軟性と速度を見せて、ノアを何かのオブジェのように縛り上げた。

「あ……っ！？」

更に、ノアの周囲のアスファルトはやはり、軟体生物じみた動きで素早く小さなドームを作っていく。

「ッ！」

短く息を吐いて、ノアの元へと走り出す。

一夜の場所から、ノアまで目測で二十メートル。

一夜なら十分の一秒もかからない。

そこで、一夜の心に唐突に疑問が湧き上がった。

どうやってノアを助ける？

アスファルトを壊すのは簡単だ。けどそれをしたらノアの身体も傷つく。そもそもコレを操ってるのは……っ！

視線のみを自動人形へやる。

自動人形はコチラを眺めていた。

唇が何回か動く。風切り音で聞こえなかったが、直感的に感じ取った。

魔法……！ それ以外こんな異常現象は考えられない。遅蒔きながら思う。

ノアの顔がアスファルトで隠されて、一夜は走る速度を緩める。

ノアと倒れている人達を助ける方法は一つ――

「一夜っ！ 私――」

ノアが全てを伝え切る前にアスファルトで外界から隔絶され、一夜の掌がアスファルトに付いた。

――自動人形をぶっ飛ばし、魔法を解かせること。

それを裏付けるように自動人形が笑みを湛えて言った。

「私と戦って勝てれば大人しく引き下がりますよ？」

背中から汗が滲み出る。

こんなふざけた異常現象を引き起こせる奴に勝てるのか？

暗雲のような疑問が心の内を取り巻く。

だけど、

コレしか解決方法がねえって言うんなら……。

一夜の周りの空間が心に呼応するかのように歪む。

「やるしかねえよな」

感情を外に出さないように不敵に笑って言った。

風呂場のトラブル——一縷の者忘れ

貸し出し用のシャンプー、リンス、ボディーソープ、タオルをプラスチックの桶に入れて裸で扉の前に立ちつくしていた。

両側にシャワーがズラリと並んであり、眼前五メートル程に大きな風呂が存在してある。

人は居ない。

おそらく、平日の昼だからだろう。

えーと……これからどうすればいいんだ？

銭湯を利用したことのない暗闇一縷は少し困る。礼儀作法はあるのだろうか？

一縷はそもそも風呂に入るつもりなどなかったのだが、その旨をアルテミスに伝えると、

『は？ 入らない？ そんなフケ山盛りに載っけて……しかも臭いし！ 入らないとダメだって。女の子にもモテないし』

『いや、モテなくてもいいんだけど』

『お風呂嫌いななの？』

『いや、別に嫌いって訳じゃ……ッ！？』手を引っ張られる。

『なら入ってもいいよね？ 服も買おうか？』

こんな反応をされて無理やりにねじ込まれたのである。

「まあ、いいか……」

まずはシャワーで身体でも洗おう。

予想外に風呂というヤツは気持ち良かった。

ドラム缶風呂とはやはり違つと。

一縷の真横の壁が音もなく、まるで水を含んだ紙を破るかのよう

に消えた。

一縷は少し驚き、眉を顰める。

これくらいの異常では声を出すほどは驚かない。

真横を見た。アルテミスが居た。

風呂に入っている。

お湯の所為で赤らんだ肌に水滴が滴っている。ギリギリの所でその豊満な胸は隠れていた。

真横に女風呂。ほとんど混浴と化していた。

「やつちやった……」

そう呟きながらアルテミスはまるで悪いのは左手なの、とても言うように睨みつけていた。

そして、一縷に気づいて瞳を向ける。

恥ずかしそうに赤らんだ頬を更に赤く染め、視線を少し外した。

大穴から見る女風呂は、男風呂と同じ作りをしている。客は三代の女性と幼女の二人だった。シャワーの前で女性は幼女の髪の毛を微笑みながら洗っている。

この事態にはどうやら気づいていないようだ。

「え？」

という声がアルテミスから洩れる。

一縷は視覚や、聴覚、感覚が引き伸ばされたのを肌で感じた。

空気が変化したのが分かり、身体がその空気に馴染んだ。

アルテミスと親子の全身がマッサージをされたかのように弛緩したのが分かる。

女性はまだで人形のようにタイルに身体を打ちつけ、布で作られたボールのように一度だけ跳ねて、倒れた。子供は親にもたれかかるように倒れた。

アルテミスはそのまま、風呂へ泥みたいに沈んでいった。お湯が飛沫となって飛ぶのが鮮明に映る。

左手が水に入ったにも関わらず、能力は発動していない。

人々が倒れた音が、風呂場に反響する。

人々が倒れたときに洩らした小さな声が聞こえた。

一縷はあり得ない異常な状況でも心を乱すことはなかった。

「……？」

何でいきなり倒れたんだ？

何の前触れもなかった筈だ。

その疑問に割り込んだ影が心の中で早口に囁くのを感じる。

「あ！ アルテミス……」

一縷は女風呂へと入っていく。

一夜の実力と自動人形の笑み

一つ聞くことを思い出して、一夜は自動人形に問う。

「デメエを造ったのは一体誰だ？」

自動人形はノアが捕らわれているアスファルトで造られたドームを見ながら、

「それよりも私をすぐに倒した方がいいと思いますけどね」

どうして？ と疑問が湧いた所で、自動人形は何でもないように言った。

「窒息死しますよ？」

ピクツと顔面が強張ったのを感じる。

死……？ 窒息、死？

意味が分からない。糸がグチャグチャ絡まったように思考がこんがらがり、解くのに苦勞する。

自動人形は呑気な様子で帽子の鰐を弄っている。コレが人の死を告げる——人を殺そうとしている人の態度なのか？

ホントは殺そうとしてないんじゃないか？ 疑問に思いつつ、アスファルトで造られた『ドーム』を見る。

所々、凹凸があり、煙草が張りついているのが見えた。

通気性は皆無のように見える。

ノアが苦しんでいる様子が暗い影として心を過ぎった。

『死』という言葉がようやく現実味を帯びて、一夜の心を突き刺す。汗が溢れ出した。

嘘かホントかなんて関係ない。速く助けないと。

出せ？ と大声で怒鳴ろうとしたが、不意に口を噤んだ。

大声で怒鳴った瞬間、余裕が抜けて、自分が圧倒的に不利になるような気がしたのだ。

こういう場面において余裕がなくなることは死を意味する。だから、落ち着け。

そう心の中で思つて自分を落ち着かせる。

一夜は小さく唇を動かした。

「今すぐ出せ」

触れた瞬間、電気が走りそんな張り詰めた声が静寂の駅前に流れる。

自動人形は、何を言ってるんですか？ と、呆れた様子で言う。

「無理ですよ。当たり前でしょう？ 私を壊すか、機能を停止させるかしかノアさんを助ける道はありません——」

一夜は自動人形の言葉を待たずに地面を蹴った。

もったい。

一夜は紙に火を点けたように、落ち着くという言葉を忘れた。

（助けねえと！）

一瞬、という表現通りに自動人形の眼前へと到達する。

右肘が右の脇腹へ突き進む。右膝は左の脇腹へ。

そのまま、押し潰そうとし、自動人形に受け止められた。

圧倒的な破壊力を秘めていた一夜の攻撃は、受け止めた自動人形の手首を折る。

感触が生々しく伝わってきた。

「おおおッ！」

構わず左拳を自動人形の頬に決めようとする。

風を切り裂く音すら聞こえない。

無音の拳は自動人形が後ろに仰け反ったことにより、空振りした。あり得ない轟音が二人の間に流れる。アスファルトを舐めるように疾走した風はレストランのショーウィンドウを割った。作り物の食べ物飛んでいく。

「ふッ！」

自動人形が短く息を吐き出して、拳を振るった。折れたのに？

湧き上がる疑問は一瞬で消失させる。考える時間などない。

ぶっ倒す。

拳を避けて、逆に自動人形の顔面に拳を振るう。

自動人形は首を振るが、頬に掠った。

頬の皮膚が切れる、前に続けざまに拳を突き出した。連撃。

自動人形は腕を交差させて、身を守ろうとする。

腕ごとへし折るように殴り続ける。

焦燥感が一夜の心を燻って余裕が削られていく。

拳が痛む。

ノアを救い出さないと。

ノアが死ぬ。

そんな強迫観念が一夜の心を蝕み、突き動かす。

両腕が交差している所を片手で掴む。

起死回生の一手。

そのまま、腕を引きずり下ろした。

帽子を深く被っている顔面が露わになる。

「な……！？」

自動人形の息を呑むような声が聞こえたが、構わず拳を握り締め

「終わりですよ」

——自動人形は厭らしくと笑うのが見えた。

直後。

下から地面が拳となって一夜に襲いかかる。

視界の端で、螺子のように捻りを加えられた地面が襲いかかってくるのを捉えた。

頭上から熱を感じた。

下から襲いかかってきた攻撃を踏み潰す。隆起した地面が元の場所にめり込んだ。

真後ろに飛び退く。自動人形の拳が空を切る。

予想外に地面の攻撃は弱かったな、と心の片隅で思いながら頭上を見る。

「……ッ！？」

心が白紙になった。

太陽のように赤く、轟々と燃え盛る炎が弾丸のような速度で迫っていたのだ。

さっきまで居たレストランを飲み込む程にとてつもない大きさだ。ヘタをすれば、ここら一帯が吹き飛んで大勢の人が死を自覚する間もなく死んでしまう。

「……!？」

地面を使った攻撃を無視してでもコレを止めないと、と一夜は判断する。

炎が降り注いだ。

暗闇一縷のブレと考え

アルテミスを風呂から上げ、その辺りに置いておく。

風邪引くか？　と思っただ、放っておく。更衣室へ向かう。心に詰め物を入れられた感じがして気持ちが悪い。

木製の扉を開けて、ロッカーから着替えを取り出して、着替える。コートを羽織って、更衣室を出る扉に手をかける。

ふと、心に入った詰め物がホントに置いて行くのか？　と、一縷に問いかける。

手が止まる。

詰め物が凄く気持ち悪い。

「はあ……」

と、小さくため息を洩らす。

大体、一縷の考えは『生きることは延命行為で何の意味もない』なのに。

何故、あの三人が風邪を引くかもしれない可能性にこんな罪悪感を抱かなければならないのか。

後頭部を思わず掻きながら言う。

「ま、コレが俺なら別にいいか」

一縷は女風呂へと引き返して行く。

それは、三人の身体をよく拭いて服を着替えさせ、革張りのベンチに寝かした時だった。

突然、声が聞こえた。

「オイオイオイ。何だよコリヤ？　人が動いてんじゃねえか」

一縷は声のする方向——女子更衣室の扉の前を向く。

青のパーカーに白のラインが入った服を着ている人が居た。下は黒のジーンズだ。年齢は一六、一七といった所か。

外見は凶暴な獣を彷彿とさせた。

三白眼で瞳はつり上がっており、時折見える犬歯は鋭い。鉄さえ噛み千切れそうである。

そいつは重苦しく息を吐いた。刺々しい雰囲気は辺りを取り巻く。「お前誰だよ？」

ギロツ、と人を射抜きそうな視線を向けて一縷に言う。

対して、一縷は無駄な体力使ってそうだなあ、と場違いなことを考えながら自己紹介する。

「俺の名前は暗闇一縷。お前は？ この状況に関係あるんだろ？」

「ああ。俺はシャル。この状況に関係はしてるな」

気だるそうに、しかし、刺々しい雰囲気はそのままにパーカーのポケットから一枚の写真を取り出し、見た。

それから、ベンチに眠っている三人を見て、その内の一人——アルテミスを指差して言った。

「ソイツの左腕を貰う」

左腕を貰う、その台詞を聞いた瞬間、アルテミスの左手には『一縷の闇の能力以外は消し去ることの出来る力』を持っていることを思い出した。

それが目的だろうとは理解できた。

理解はできたが理由も利益も見当たらない。何が目的なんだ？

一縷はアルテミスを横目で見やる。

そして、目の前の少年を見た。

左腕を千切れるような怪力少年には見えないし、切断できる武器も持つてなさそうだ。噛み千切るのか？

「貰うってどうやって貰うんだ？」

「斬るんだよ。決まってるだろ？」

シャルは腰の辺りに手を伸ばした。

一縷の目の前に何かが迫っていた。

息を吐く間すらない圧倒的な速度。

一縷の心がようやく警戒音を叩き鳴らす。移動が見えなかった。一縷を守る為に闇が盾として現れる。

音もなく、何かを闇が受け止めた。

シャルは少々驚いて目を細め、動きを止めた。

闇が受け止めたモノは果物ナイフより大きいくらいのナイフだった。刃渡りは一五センチ程か。

一縷は闇を制御し、ナイフを奪い取ろうとするが、その前にナイフが闇から遠のいた。

意識すると闇の操作が遅い。

ふっ、と小さく息を吐いてシャルはナイフを突き出す。

あまりの速さに一縷の動体視力では視認仕切れない。銀色がレーザーのように伸びる。

適当に闇を身体中に纏おうとするが、意識して制御すると遅すぎる。顔と心臓だけはどうにか闇で纏う。

銀色のレーザーは角度を大きく変えた。

一縷は避けようと身体を動かすことさえ出来ずにナイフが深々と肩に突き刺さる。肉の繊維が断ち切れたのが分かった。

「……ッ!？」

一縷の身体はトラックに跳ね飛ばされたように肩から飛んだ。

真後ろにあつた女風呂へと続く扉に身体が叩きつけられる。扉の金具が荒々しい音と共に壊れ、扉はタイルを滑る。

身体がタイルに投げ出された。

シャルはタイルの僅かな溝に流れる血を見ながら肩を竦める。ナイフを上下に振るう。血が飛び散る。

「弱すぎ。あの黒いのは見かけ倒しかよ」

ガッカリしたようにそう言っ、ベンチへと歩く。

その真後ろに倒れていた一縷は冷静に左肩を見る。

だらだらと滝のように流れる血が印象的だ。痛みはない。麻痺しているのだろう。

まだ、戦える。

それだけ分かればもう充分だった。

「待て」

立ち上がりながら言う。

「ああ？」

シャルは目線を一縷にやり、ため息を吐く。

「お前と俺との力量差はわかんたろ？」

「わかるけど、止める」

一縷は宿題を前にした学生のように面倒くさいなあ、と思いながら笑みを浮かべる。

「わっかんねえなア」

と言いながらシャルは血染めのナイフを一縷の心臓に向ける。

「コイツの彼女ってヤツか？」

「違う」

「友達ってヤツか？」

「……違う」

「なら何で止める？」

「止めたいと思うからだ」

一縷はその問いかけの答えに笑いそうになる。

（ああ、俺の考えはホントにブレてるな）

生まれたての心

視界が炎で埋め尽くされ——炎が四方に霧散した。まるで、炎が刀で細切れにされたかのようにだった。

炎の中心点。

倒れる筈だった少年が無傷で立って居た。

捻れが加えられた地面での攻撃が一夜に当たる三センチ程で真下に突っ込んでおり、やはり一夜にダメージを与えることはできていなかった。

それを自動人形は一瞬、笑んでいる一夜を呆けたように見る。

そして、ようやく自分の攻撃が防がれたのだと気づく。

負の感情が爆発的に膨れ上がった。

圧倒的な実力差に絶望する。

理解不能な技が相手にあることに恐怖した。

生まれたての心が爆発する。

「な、何をしたあああッ！」

自動人形が感情を剥き出しにして吼え、一夜に突進した。

対して一夜は化けの皮が剥がれ落ちた自動人形に向かって言う。

「俺の空間制御はお前のお陰で進化したみてえだ」

唐突に、一夜の両隣——洋服店とレストランから地面が盛り上がった。

ズツ、と。

一気に地面が隆起した。店の外壁がアスファルトの波に削り取られ、一夜に襲いかかる。

大きさは縦横二〇メートル。

一夜は指先一つ動かすことはなかった。

空間を操る。

倒れている人達がアスファルトの波に巻き込まれる手前の空間を真上に曲げる。

結果。

波が音もなく、そのままの速度で真上に攻撃する。アスファルトは車が急停止したかのように止まり、その衝撃でアスファルトの波を生み出した地面が嫌な音を立ててひび割れた。

自動人形は声にならない絶叫を喉から迸らせながら一夜の眼前に迫り来る。

今気づいたとばかりに一夜は自動人形を見た。

一夜に身体が引き摺られるように走っていた。

恐怖が自動人形の周りに渦巻いているような錯覚がする。

自動人形は狂い叫び、拳を突き出した。

その拳は一夜の顔面を完全に捉えている。
が。

唐突に拳は一夜の顔面を避けるように流れた。

自動人形は全身が緊張で強張ったのが見て取れたが、しかし、許す気などサラサラない。

同情さえしなかった。

一夜は拳を握り締める。

「おわああッ！」

自動人形が叫び声を上げながら、腕で頭を守ろうとする。
遅い。

一夜は拳を大きく振った。

拳が自動人形の顔面を捉え、吹き飛ばした。

一縷の確固たる意志

「ふッ……！」

シャルが弾丸のように突っ込んで来た。

（見える……？）

シャルの挙動がクリアに見える。

その疑問を放置して眼前の空間に闇の膜を張り、水の膜から水泡を出すように闇を飛ばした。

シャルは球状になった闇をタイルを舐めれるように身を屈めて避けていく。

足元のタイルが次々と踏み砕かれていく。

膜は即座に槍と化して、シャルの足元を狙い打つ。

爪先に槍が突き刺さるうとした瞬間、シャルは跳んだ。

槍はタイルを串刺しにし、闇は霧のように散って消えた。

天井近くまで達していたシャルはナイフを恐るべき速度で振った。シュン、と。

今まで聞いたことのない音が聞こえた。

小さく、それでいて威圧的な音。

一縷は迷うことなく槍を掌から生成。

槍を飛ばした。

何かが当たったが、それだけだった。

槍は速度こそ落ちたものの、そのまま飛んでいく。

恐らく空気を切り裂いて作った擬似的な斬撃だったのだろう。

シャルはやはり迷うことなくナイフを振り回す。

槍が細切れになった。

恐るべきことに少し身体が浮く。天井に頭がつきそうになる。

細切れになった槍はシャルの死角——脇腹にあったナイフに吸い寄せられた。

一縷はそれに気づき、眉を顰める。シャルは一縷に全神経を集中

させているようでそれに気づいている様子はない。

どういうことだ？ そう思いながらも攻撃の手は休めない。
銃五本。シャルを拘束する為の網。

それらを一瞬で作り上げ、銃弾さながらの速度で飛ばした。

コレなら行けるハズだ。

シャルはナイフを振り上げて、天井に突き刺し、身体を揺する。

先に到達した銃を紙一重で避けた。銃が天井を突き抜ける。

次に行った銃の側面に蹴りを放った。

側面を蹴られた銃は横に向きを変え、シャルに向かって飛んできた銃を弾いた。

シャルはナイフを持っていない方の手で天井を強く押す。

天井に亀裂が走り、シャルは右斜めに落下を始める。残りの銃二本と網が天井を打ち壊して飛んで行った。

胸の辺りが痛む。

「何だお前？ いきなり強くなってんじゃん。人間特有の愛する人が居ると強くなる理論かよ？」

着地したシャルが真面目な様子で一縷に問う。

一縷にだつて分からないので無視する。

「お前、何者だよ？ ホントに」

「お前こそ何者だ？ その身体能力は人間のモノじゃない」

「テムエが言える義理かよ。訳わかんねえ黒いモンだしやがって。

まあ、俺の身体能力が並外れてるのはカルマに造られた人形だからだな」

「カルマ……？」

どこかで聞いた名前だな、と思い過去の記憶を掘り下げる。思い当たった。

カルマⅡモレクス。

世界最高の科学者。

「アルテミスの能力の解析でもしようって言うのか？」

シャルは面倒くさそうに首を振る。

「さあな。俺には関係ねえよ。人形だからな」

すっかり諦めたような口調に思わず一縷は言う。

「お前にお前の意志はないのか？」

対して、シャルはハッと鼻で笑う。

「意志？ 俺は人形だぜ？ 人間とは違う。テメエの意志なんて二の次になっちまう。そういうモノなんだ」

シャルはそう言うと、タイルを踏んだ。タイルが弾け飛ぶ。

一瞬で一縷の元へと辿り着いた。何かを諦めた瞳が一縷の心臓にぶつかる。

今までのシャルの挙動を思い返す。

決して折ることの出来ない思いが心の底から湧き上がった。

——コイツを縛る命令を今ここで打ち消してやる。

パイ投げ

一〇メートル程吹き飛んだ自動人形はピクリとも動かない。
(勝った)

そう思った瞬間、緊張状態が解けて脱力した。

膝が勝手に折れてしまう。地面に手を着いて頂垂れる。

身体がだるい。

発汗機能が怒り狂ったように汗が噴き出た。

熱で頬がとんでもなく熱い。

戦闘中には抑え込んでいた疑問が堰を切ったように溢れ出す。

想像以上に身体が動いたのはなんでだ？

力も上がった。

空間制御も進化していた。

今までの空間制御なら攻撃を逸らすことなんて絶対に出来なかったと思う。

そして、それを疑問に感じずに闘っていた自分自身に圧倒的な疑問が浮かび上がった。

どういうことだ？

「一夜っ！」

ノアの泣きそうな声が後ろから聞こえた。
疑問が一瞬、破裂する。

よかった。

一夜の頬が緩む。

そして、微笑んだまま意識が飛んだ。

ノアの声が聞こえた気がした。

身体に重圧がかかったのを感じた。

（重い……）

ぼんやりとした意識の中でそう思い、重い瞼を開けた。
薄汚い天井が映る。視界の端々に映るモノからすると自分の部屋
のようだった。

（俺は意識を失ってそれで……それでどうなったんだ？）

腹の辺りに再び重圧を感じる。

視線を向けると、そこにはノアが居た。

そこに生きて存在している……それだけでほっと安堵と吐息を吐
きだし、

柔らかく閉じられている瞼から頬に伝っている涙の痕がくつきり
と見えた。

涙はとうに蒸発し、塩が頬にこびり付いている。

「……ッ！」

『一夜っ！』そう泣き出しそうな声が再生させられる。

どれだけ心配してくれたのか。

それを考えると心が抉られたような気持ちになる。

会って間もない自分のためにここまで泣く必要なんてないじゃね
えか。

何で会ったばかりの人の為に泣けるのだろうか？

ノアの小さな唇が動く。

「いちや……」

とても心配そうな声を発した。

一夜は涙の痕を消してやりたい気持ちに駆られるが頬に手をやる
勇気なんてなかった。

少し迷ってから比較的触りやすい頭に手をやった。

寝ても覚めても自分のことを心配してくれているどこまでも純心な少女に言う。

「俺は起きたから。もう心配しなくてもいいから」

一夜は自分でも意識しない内に微笑む。

「先輩……！」

地獄の底へと誘われるような声が聞こえた。

祠の声だ。

「伊沢波さん……？」

頭を上げる。

玄関に黒いオーラが取り巻いている気がする少女の姿があった。頬が引き攣っている。

両手には買い物袋があった。

どう見積もっても二人分には多い量の食材が入っている。

一夜の大好きなお菓子里に欠かせないパイ生地があった。

もしかして、一夜とノアの為に料理でも作ってくれるつもりだったのかもしれない。

祠は冷たい視線を一夜に投げかける。

「ふーん。先輩は泣き疲れと、看病疲れで寝ている女の子の頭をエロく撫でる性癖があったんですね？」

「何で確認口調？」

「最低ですね」

祠が一夜の疑問を無視して吐き捨てた。

「えー」

一夜が不満の声を洩らすと同時に、ノアがぎゅっと布団越しに抱き締めてきた。

「おうつ！？」

びっくりして裏声を上げてしまう。

直後。

ゴッ！ と、顔面にパイ生地を投げつけられた。

全部、ぶっ飛べばいいな

後ろへ仰け反る。

ズバン！ と下腹部がナイフにより斬れる。

筋肉繊維が断ち切れた。

激痛が走る。

「ッ！」

血が噴き出てシャルの顔に噴きかかった。

（やはりコイツの攻撃は避けれない——！）

幾らシャルの言う通りスペックが上がったからってまだシャルの方が圧倒的に上だ。

ナイフを心臓に一振りすれば殺される。

黒色の鎧のように闇を身体に纏う。

但し、左上半身には纏わない。

「しま……ッ！」

一縷はできるだけ悲痛な顔で言う。

そして、シャルと一縷は同時に行動する。

一縷は闇を纏った右腕を肩を守るように突き出す。

シャルは釣られた様に肩に狙いを定めてナイフを突き出す。

掌に纏っている闇にナイフが突き立てられた。

「おああ！」

シャルは闇を力任せに貫いた。

右の掌にナイフが突き刺さる。

一縷は微笑しながら、ナイフを握り締めた。

闇を掌に生成。

闇はシャルの右腕に植物のツタのように絡みついた。

そこで初めてシャルの目が驚愕に見開かれた。

「演技——ッ！？」

シャルが驚愕の声を上げる。

一縷は微笑を浮かべて答えた。

「今までのお前の言動から馬鹿だつてことは分かつてたからな。絶対に救いを求めて肩を狙うと思った」

「救い、だあ？」

憎悪を秘めた視線を一縷に飛ばす。

ギリギリとナイフが右手を挟り続ける。

焼けるような痛みが右手に走った。

「ああ。お前はアルテミスの左腕を奪いたくなかった」

シャルは一縷の刀のように鋭い瞳に気圧されたように押されたようによろめいた。

「お前に何が分かんたよ……ッ」

ギリギリと、奥歯を噛み締め搾り取るように言葉を発す。

「お前は、シャルは、アルテミスを命令で傷つけられないプライドの高いお人好しってことくらいは分かる」

シャルの瞳が揺らぐ。

凶悪な瞳から、子供の瞳が見えた。

一縷は畳みかけるように言う。

「そうじゃないならシャルは直ぐにアルテミスの左腕を斬った筈だ。最初の一撃で弱いからってガツカリもしない」

「ッ！」

不快感と怒りと疑問が一気に溢れ出たように見えた。

心の底を何故読めたのかという疑問と、土足で心を踏み躪られた不快感があるのだろう。

シャルはナイフを右手から抜こうと力を入れようとするが、闇に邪魔され思うように動かない。

「唯の戦闘狂かもしれないだろうが……！ 違うのかよ！」

何が救いだ！ と咬みつくように吠える。

一縷は間髪入れず言った。

「闘うのが好きなのか？」

ぐらり、とシャルの創られた芯に罅^{ひび}が入ったように瞳が揺れる。

「うるツツツせえツツ!!」

シャルが爆発したように拳を振るった。
その拳は余りにも弱く見える。

遅い。

左拳で腕を殴って弾いた。

シャルの顔が弾かれた腕で隠れる。

素早く拳を大きく引いた。

「弱すぎ。あの黒いのは見かけ倒しかよ」

ガツカリとした声。

「さあな。俺には関係ねえよ。人形だからな」

全てを諦めた声。

「意志？ 俺は人形だぜ？ 人間とは違う。テメエの意志なんて二の次になっちまう。そういうモノなんだ」

諦めた瞳。

シャルの一挙手一投足を思い出す。

全ての心が読めた訳ではない。

それでも、シャルの悩みや闇はそれだけではないように見えた。
だから、

「全部、ぶっ飛ばばいいな」

シャルの顔面に闇を纏った拳を突き刺し、薙ぎ倒した。

血滴る女子更衣室で真っ裸の一人の青年が鞆から出した包帯を右手に巻いていた。

この包帯の触れ込み通り、包帯が触れた場所の痛みが和らぐ。
右手に巻いた包帯を千切る。

ベンチに寝かせている気絶した女三人（三十路、幼女、少女）を

尻目に包帯を肩に適当に巻いていく。

巻き終わった包帯を噛みちぎった。

それから横にあった洋服を着る。

白い字で『14』と書いてある黒を基調としたＴシャツと、茶のデニムのパンツだ。

どうやらアルテミスが服を買って来てくれたらしく、ロッカーの中に入ってた。

というか、よくサイズが分かったなと思う。

女三人が眠りから覚めたように同時に起き上った。

（外に居た人達大丈夫なのか）

疑問に感じながら声をかける。

「ようやく起きたか」

三人は何故ここに居るのか、という疑問をアイコンタクトでやり取りし合う。

凄まじいコミュニケーション能力である。

それから、幼女が凄まじく大人っぽい感じで言った。

「わたしはお風呂に入ってたと思ったんだけど？」

女性は、服をベタベタ触って、

「ていうか服……」

最後にアルテミスが一縷に言う。

「どうなってるの？」

一縷は答えた。

通報モノのその答えを。

「風邪引くかなと思って着替えさせただけだけど」

ビキイ！ と女三人の血管がブチ切れる音がした。

「私の五時間も外で座ってて汗だらけの服を嗅がれたってこと!？」

「ふふふふ。わたしたちは魅力がないおんな三人と。そういうこ

とが言いたいわけね」

「……ッ！ その記憶を殺し尽してやる……ッ！」

何か、真っ赤に顔を染めながら尋常じゃない殺気を放つ三人。じりじりと間合いを詰めてくる。

一縷は気圧されるように後退しながら、

「ちよつと待てよ。お前たちが風邪を引かないように善意でやったのにそれはないだろ……あ、念入りに身体は拭いたから大丈夫」

ボン、と爆弾が爆発するかのように更に顔を赤らめた三人。

そして次の瞬間。

恥ずかしさと憎しみを原動力に飛びかかってきた。

一夜と一縷の影を持つ者の邂逅

伊沢波祠は人型のパンチングマシンに拳を撃ちつける。

液晶画面に『60』という文字が浮かび上がった。

その下に勿体ぶった間を開けてから『激弱』

『俺は起きたから。もう心配しなくてもいいから』

そう言つて微笑む先輩の姿が浮かぶ。

凄くム力つく。

心の中にコールドールみたいに黒く、有害な何かが渦巻く。

もう一回硬貨を入れて殴ろうか、『買い物』に行こうか悩む。

買い物と言つても普通の女の子よろしく服を見たり、化粧品を吟味したりする訳ではない。

3DTに物語りをインストールする買い物だ。ネットを通じて買うので買っている感覚がしないのがデメリットだろう。ストレス解消にはならない。

3DT——カルマⅡモレクスが発明した電子反射板で光を反射、屈折させて立体の像を浮かばせるというモノを応用させた3Dテレビを携帯化させたモノだ。

けど。

（そもそも私が満足するようなものがないのよねー）

最近は恋愛モノが多すぎてゲンナリする。

まあ風潮なんだろうけど。

と。

優しく肩を叩かれた。

振り向くと、金髪を短く伸ばし、端正な顔をしている少年が居た。先輩と同じくらいの歳だと思う。

金髪はいかにも女慣れしてそんな笑みを浮かべながら、

「パンチの打ち方を教えてあげようか？」

百人居れば百人は落ちそうな笑顔だなあ、とかぼんやりした心で考える。

金髪はそれを了承と受け取ったのか、それとも元から取るつもりもないのか硬貨を投入した。

人型のパンチングマシンが挑発的に人差し指をくいくいと折り曲げる。

「ふッ？」

金髪は小さく息を吐いて顔面を殴った。

ゴウン！ と大きな音が響き、パンチングマシンが揺れる。

『700』という文字が浮かび、先程と同じ間を開けて陳腐な音楽が鳴り、『記録更新』という文字と『無敵』という文字が浮かんだ。周りに居た人達は「おお」と歓声とも驚嘆ともつかないような声を上げた。

金髪無敵はプライドが満たされたような笑みを浮かべて、

「どう？」

何がどう？　なのは全く分からないが愛想笑い抜群の笑顔を浮かべて言う。

「凄いですね。それじゃあ私はこれで」

ゲームセンターなんて来るんじゃないかった、そんな後悔をしつつ歩きだした瞬間、腕を掴まれた。

「ちよっと待ってよ。あんたアレだよな」

「なんですか？」

ムスツとした表情で言う。

「黒い髪に黒い瞳、モーセの一族じゃない？」

モーセ——黒い髪に黒い瞳が特徴の仲間意識が強い一族で数万年前まで小さな孤島で暮らしていた一族だ。

とはいえ別にモーセが珍しい訳ではない。

モーセの子と他の者が結婚して子供を産んだ所で遺伝的な問題で黒髪黒眼の人間が産まれてくるのだから。数万年前から今までで、

世界の三割は黒髪黒眼になっているとの報告も出ているくらいである。

祠は無表情のまま言う。

「違いますよ」

「ああ。そうなんだ。美人だからテツキリそうおもちゃった」

「それ根も葉もない噂話なんじゃないですか何はともあれさようならです」

つらつらとそう言うってから腕を剥がそうとするが金髪は離してくれない。

「離してくれませんか？」

「嫌だね」

金髪は厭らしい笑みを浮かべて言う。

下品に口角を上げる。

周りに居た人達は視線をワザとらしく逸らし、二人の様子を静観している。

自動ドアが開いた音が聞こえた。

祠は『先輩』だと、そう直感的に感じる。

——先輩だ！

祠は柄にもなく笑って後ろを振り向いた。

自動ドアの前。

そこに居たのは『暴力的な外見の少年』だった。

一夜ではない。

ゲームセンターに居た人達はボサボサの茶髪に三白眼の少年の衣服に呆気にとられていた。

青に白のラインが入ったパーカーに黒のジーンズ、ここまでは普通だ。

但し、大量の血が付いていなければ。

子供ような瞳でゲームセンターを眺める。

「あつれー？ ゲームセンって所は騒がしい所じゃねえの？ 何で俺

に注目が集まっただよ？」

「当たり前だろ！ テメエ何なんだ！」

金髪がパーカーに詰問する。

「ああ。強姦しようとしてた奴か」

「ご……ッ！？ ナンパだっつうのボケ！」

怒鳴る金髪に不快そうに眉を顰める。

「嫌がつてる女をナンパするのが強姦って言うんじゃないっただけ？」

「はあ！？ 一切嫌がつてねえよ」

「いや。嫌がつてましたけど」

祠は金髪の馬鹿発言にツツコミを入れる。

「な！？ テメエ！ 顔赤くして喜んでたじゃねえか！」

犬歯を剥き出しにして吠える金髪。

祠は意味不明な金髪の言葉に一瞬頭が真っ白になる。

「あとでぶん殴ってやる！」

吠えた金髪をパーカーは眉を顰めたまま裏拳を顔面に叩きこんだ。

金髪は呻き声を上げることさえ許されず、その場に沈みこむ。

直後。

ゲームセンターが悲鳴で埋め尽くされた。

厄災と厄災のトレードは受け付けない

『元気？』

『あんたの父さん、凄い落ち込んでんだけど』

『誤送信だ誤送信』

『写真』

『返事ー』

一日前に来ていた馬鹿父からのメールである。
どうやら一夜は一日中寝たきりだったらしい。

なら、ノアは一日中一夜が起きるのを待っていたのだろうか？

一夜はパイ生地を冷凍庫にプチ込みながら携帯を操作する。

「つか父さんからメールなんざ珍しい。後半は明らかテンション違うけど」

『元気とは言いづらい。で、どこいんの？』

送信ボタンを押して数秒後。

直ぐにメールがやってきた。

『エヌルタに居るけど。もう少しで帰る』

「エヌルタあ？ すげえ遠いじゃねえか……」

ありえねえ……と呟き、添付ファイルに写真が付いているのに気づいた。

「そういや。『写真』って送ってたな」

開いてみる。

ウオン、という効果音と共に写真が展開された。

直径五センチの3Dとして浮かび上がってきたのは一人のガッシリとした肉体の男（推定二十歳程）と、一人の可愛い少女（推定十四歳程）とその二人に首を絞めつけられている一夜の義父——華奢な体型の男性が居た。

父さんはケータイを取り返そうともがいているのだろっ。ケータイに手を伸ばしている。

一夜はふつと鼻で笑ってケータイを閉じた。

（楽しそうに旅してんじゃねえか）

後半の馬鹿メールは女子の方だな、と勝手に納得する。
と。

ドアが開いた音がした。

台所から顔を出して客人に声をかけようとして、
声がつつかえたように「よお」が言えなかった。

理由は簡単。

『下心が見え見えな男は嫌いなんです』なんて言っていたあの祠が
男を連れていたからだ。

（男の友達なんて居たのか……？）

凶暴そうな外見の少年は祠の後ろにつまらなそうに突っ立っていた。
た。

衣服は至って普通。

というより、もの凄く安く済ませたであろう赤のポロシャツにジ
ーパンを着ていた。

屈辱的なことにポロシャツには『クロノス』と黄色で書かれてあ
る。おそらく店名だ。

一夜はそんなどうでもいいことを観察しながら祠の元へ歩いてい
く。

「で。何の用？」

祠は唐突に言った。

「トレードしましょう」

「は？」

一夜には意味が分からずただ聞き返した。

「だから。男の子は男の子同士。女の子は女の子同士の方がいいじ
やないですか？」

祠の頬を摘まんで伸ばす。

「何言ってるの？」

祠は一夜の腕を強引に引き離し、一夜の足を土足で踏みつつ頬を

思いつきり抓る。

「伊沢波祠ふぁん。離ひて……」

「嫌、です」

二人の様子に嫌気が差したのか男が祠の肩を指先で叩く。

「おい。スキンシップは止めて本題に入ってくんね？」

「別にスキンシップなんかじゃない！」

キツ、と少年を真つ赤な顔で睨みつける祠。

顔を真つ赤にしているのは親と仲良くしていることを茶化された中学生のような感じなのかもしれない。

「あ、そう」

と、飄々とした様子で少年は言う。

ごほん、と場を持ち直す為に一つ咳払いを入れる祠。

「まあ、ともかくですね。色々な理由により匿うことになった訳です」

「いろいろ？」

「色々」

「だから、色々って何？」

「条件は呑んでくれたら話します。ノアさんとこのシャルさんを取り替えてくれたら」

絶対に不吉だ。受け取ってはいけない。

一夜は直感的にそう思う。

それにノアを渡す訳にはいかない。

アイツは世界から狙われている可能性がある。

衣服の繊維があそこに残っており、世界をそれを見つけたら？

指紋は？

いや、今でさえ自動人形なんてモノに少女は追われているのだ。そんな女の子を祠に預ける訳にはいかない。

だけど。

俺は世界からコイツを守るのか？

自動人形。製造者。その全てから。

一夜は不安を拭おうと、いや、不安を後回しにしようと思つて笑つてから。

「拾ってきたのがお前ならお前が責任取りやがれ」

グイッと、祠の両肩を押し、ドアを閉めた。

すかさず鍵を閉める。

「ふう。ミッシヨン終了」

「先輩！ その女の子とトレードだつて言ってるんです！ ノアだつて私と一緒にの方が……ッ？」

愛する後輩が何か言っているが、無視して台所に歩きだす。何か作ろう。

祠は何か決心したかのように言った。

「私が男の子と一つ屋根の下で暮らしてもいいんですか!？」

「間違いは犯すなよー」

もの凄く適当な調子で一夜は答えた。

一縷の受難

一縷の頬は丘のように腫れ上がり、青痣が出来ていた。

腕にはあの幼女の歯形がびっしりと、親の仇のように付いている。

「俺、どう悪いことした……？」

独り言をぼそつと呟くと、部屋を見回した。

柑橘系の爽やかで甘酸っぱい匂いのするピンク空間だ。

カーテンもピンクなら今座っているクッションもピンクである。

部屋は大きく、六部屋もある高級マンションだ。

そういえば、この部屋で飯を作って食べたのを思い出す。

（なるほど、あれはアルテミスの部屋だったのか）

なぜ一縷がアルテミスの部屋に居るかというと、一縷の大怪我が原因だ。

あの三人が一縷をボコボコにしている途中で、怪我をしていることに気づき、何で速く言わないのよ！ と怒られ、今に至る。

絶対安静宣言をアルテミスから下された一縷は、つまらなそうに欠伸をした。

昨日からこの調子なので暇だ。

「ふあー寝みい……」

ふああ、と欠伸をしてゴロンと寝転がり、目を瞑る。

がちやりと扉を開ける音と同時にこんがりと、肉の香ばしい匂いが鼻腔をくすぐった。

目を開けると、二つの皿を持ってアルテミスが立っていた。器用に右腕の上に皿を乗っけている。

「しっかりリラックスしてるわね」

うんうん、と満足げに頷くアルテミス。

「どんな仕事してたらこんな部屋を借りれるんだ？」

「あれ言ってなかったけ？ 科学者よ科学者」

「そうか。だから魔力制御装置にも詳しくった訳だ」
「まあね」

アルテミスは軽く頷くと、ピンクのテーブルに皿を置いた。
綺麗にこんがりと焼けている肉は「早く食べて」と懇願している
ようにも見える。

一縷はふと、等価交換という言葉を思いだした。
そこから、思考が濁流のように一縷の心を席卷していく。

例えば、人が人肉を食べるとしてその人一人分の命で一人の人間
を何日生きさせることができるのだろうか？

ふとした考えはすぐさま流れ、思考が反転する。

一瞬思考は白紙になり、シャルの諦めた瞳が浮かんだ。

自称人形のアイツを。

今度会ったときは参考程度に俺の生き方でも教えてやるかな、と
心の片隅で思う。

（まあ人生なんて無駄の塊なんだから悩むなんて馬鹿馬鹿しいが）
そんなことを思っていた一縷にアルテミスがほら、一緒に食べよ
と肘でつついてくる。

見れば、紫色の得体のしれないジュース（アルテミスの分はお茶）
と、ステーキ、カリッと香ばしく焼かれているパンがあった。

「お礼の前に訊くが、この紫の物体は何だ？」

不信そうな顔を作って一縷が言う。

アルテミスは不穏な笑みを浮かべたまま何も言わない。

一縷はよくわからない飲み物を『言わないなら飲んでみるよ』と
いった表情で飲み、口の中でどろっとした粘液のような感触がした。
ガソリンと、生肉を混ぜ合わせたあり得ない味がする。

一刻も速くこの異物を排除しなければと飲み下す。

粘液が喉にガムのように張り付いている感じがして激しく不快だ。
アルテミスのお茶を奪い取って喉に残る不快感を消し去る。

「まじい……」

舌がヒリヒリしていることに今更ながら気づく。

「怪我の治りがよくなるらしいよ？」
そういつてアルテミスは大笑いした。

ノアの涙と一夜の感情

ノアの大きな瞳が薄ぼんやりと見開かれた。

一夜はそれを横目で見やり、野菜炒めを咀嚼しながら言う。

「よう。起きたか？」

「一夜……？」

ノアは一夜を見て、嬉しさと寂しさが同居したかのようなそんな顔した。

そんな大人びた表情に一夜は一瞬ドキツとする。

ノアはのろのろと、病人のように起き上がって野菜炒めを見る。

何かを決意したような顔をする。

空気を伝って一夜に緊張を告げた。

何か嫌なことを言うぞ、と空気が告げる。

一夜は緊張感を紛らわす為に――いや、それ以上にノアの発言を聞きたくなかった為、野菜炒めを箸で指しつつ言う。

「食べたいのか？」

うつん、とノアは首を振る。

そうじゃなくて、とでも言いたげな雰囲気だ。

「あの、私……」

言い辛そうに、ノアは唇は開く。

「迷惑だと思うんだよ」

世界が終わったような物言いだった。

砂漠に吹く一陣の風のように耳を通り過ぎるのを感じる。

ああ、と一夜は虚空にある落とし穴に嵌ったように意識が塗り潰された。

じんわりと部屋の熱気が上がったような錯覚に陥る。

粘液みたいな汗が全身から溢れ出た。

「私のせいであんな変な人たちに襲われて、意識を失って……！」
ノアが小さく叫ぶ。

大事な物を滅茶苦茶に破壊するように。

「私がここに居たら迷惑がかかるから！ だから……！」

一瞬、言葉がつつかえたかのように黙ってから、

「出ていくから。もうこれ以上一夜には迷惑かけないから……」

ノアの言葉は闇に溶けていくようだった。

「何だよそれ」

一夜の声は失望と裏切られた者のそれだった。

声が震える。

義務感で、責任を感じて、コイツは一日中俺を待ってたのか？

涙を流して？

重苦しい怒りが砂塵のように心の内を渦巻いて塗り潰していく。

「ふざけんなよ」

震える一夜の声にノアがびくつと身体を震わして反応する。

「え……？」

その不安そうな声さえもムカつく。

「俺はノアが好きだから守ったのに、お前は責任感で俺のそばに居たのかよ……？」

触れれば弾かれそうな怒りと、何か別の感情が籠もった声が室内に流れる。

目頭が勝手に熱くなる。

何で、そんなに怒ってるんだ俺？ 一夜は自分に問いたただすが答えはない。

だけど。

あの笑顔が、あの一方的な約束が特別なことでもなく、誰でもよくていつでも破棄できるモノだと思つと凄く虚しくてムカついた。

「お前は……俺と一緒に居たくないのか？ ノアにとって俺って……」

……

その先が怖くて言えなかった。

「うん」と言われると、

それを考えると怖かった。

れけど、言わなければノアが離れてしまっ、漠然と、だが確信を持っていた。

「その程度の存在なのか？」

耳に残るおかしな声だった。

ノアは首を勢いよく何回も横に振る。

綺麗な白銀色の髪が大きく靡く。

一夜は大きく息を吐き、脱力したいのをすんでの所で我慢する。

世界は大きく、一夜の命をかけてもノアを守れないかもしれない。

だけど、それでも。

心の底からこう思う。

「俺は、ノアと一緒に居たい」

一夜は自分の言いたいことは言い終えた。

黙ってノアを見る。

びくつ、と一夜は仰け反った。

ノアは俯いて泣いていた。

まるで迷子の子供が親を見つけて安心したようなそんな安堵の涙だった。

ノアは色々不安を背負っていたのだろう。

喪った記憶。迷惑をかけているのかもしれないという思い。

そして一夜が気絶してしまったことで溢れ出た『迷惑をかけてい

る』という思い。

相当苦しかった筈なのに涙を見せずに今まで一夜と居たのだろう。

一夜に出ていくと言ったのだろっ。

それが幾らか払拭されて涙として出て行っているのだ。

一夜は背中を擦ってやろうか、と考えるが決意が足りず、糸の切れた人形のように手が宙をさ迷う。

布団に涙がポタポタと降る。

ふああ、と力の抜ける声で泣く。

ノアは目頭を手の甲で拭いながら言う。

「私も、居たい……ふあっ。あああ……」

ノアには悪いが泣いているという事実に一夜は安堵していた。
なぜなら、一夜と一緒に居ることがノアの『特別』だとわかった
のだから。

が、いつまでも泣かれると気まづくなる。

一夜には泣いている女の子に欲情したり、無視したりする高等スキルは持っていないのだ。

（いや、正直に言えばちよつとだけあれだったけど！）

「そういえば、青空が見えるんじゃないかなあ！」

ベッドの上に登りカーテンを開け放つ。

空気を読んでくれよ！　そう祈りながら空を見る。

そこには望んだ通りの青空があった。

陽光が入ってこない為、目に優しく青空が見れるのがポイントが高い。

「うわあ……」

いつの間にか一夜の隣に居たノアが感嘆の声をあげる。

（いつの間にか、か……）

一夜の隣にいつの間にか居たこの少女にはいつの間にか一夜の隣に居るのがふさわしいように感じて、微笑む。

ノアは、涙を流したせいで頬を上気させ、嬉しそうに微笑んでいる。

「綺麗だね」

と、ノアは呟く。

一夜は清々しく笑ってこう答えた。

「ああ。そうだな」

二人は日常の幸せを噛みしめ、他愛もないことを話しながら小さな窓から空を眺めていた。

謎は沢山残っている。

製造者、魔法を使う自動人形、世界を変えろという言葉の意味。

そして、ノアの記憶。

だけ。

ノアが隣で笑顔で居てくれれば何とかかなりそつな気がする。

テレビから見る世界とその後

ピリピリした雰囲気を纏いながら祠は自分の部屋にシャルを連れていった。

デフォルメされた羊型のクッションをシャルに渡す。

シャルは人間慣れしてきた獣のようにクッションに座り込んだ。シャルは周りを見渡しながら言う。

「お前、何ピリピリしてんの」

祠は何がムカついたのか、イライラした声で、そっけなく言う。

「別に」

「もしかして恋ってやつかよ？」

「違っつてば！」

ささくれだつた心に塩を塗るような言葉に更にイライラしながら祠は否定する。

そうだ。恋なんかじゃないはずだ。

次の瞬間、記憶にこびり付いて離れない感情が雪崩れこんできた。ノアに向かつて微笑んでいたのに苛立った感情。先輩の手を握り締めながら祈っていた彼女を羨ましく思った感情。

祠はそれらを気にせずテレビのリモコンを探し始める。

気にしない理由は一つだ。

『何か別の感情に決まっているから』

そんな祠を見ながらシャルはジーパンに付いているホルダーからナイフを取り出す。

銀色に輝く刀身を適当な感じで掌にペシペシ叩きつけながら問う。
「にしても。いきなり俺を住まわすなんて何考えてんだよお前。服も無理矢理……言つとくけど礼なんて期待すんなよ」

祠は机の足を蹴りつつ、

「助けてくれたから。助けるだけはおこうと思ひまして。それに住むところないんでしょう？ ……ってナイフなんて持ってたん

ですか!？」

祠のひきつった絶叫は軽くスルーして唐突に告白する。

「ああ。そういえば俺って人間じゃないんだぜ。それでもいいの
よ」

「そうだと思います」

と、全く本気にしていない祠の声。

「お前、本気にしてねえだろ」

「ええ全く」

テレビを点けるながら祠は答える。

そう言えばテレビを先輩が起きるまで見ていなかったことに気づく。心の中で舌打ちする。

まず画面に映ったのは銭湯だった。

屋根が崩壊しており、タイルにはベツトリと血の跡。

まるで巨人が戦ったかのようなだった。

「ああ。俺とあのクソ野郎がやったヤツか」

と、シャルが忌々しそうに言った。

次に映ったのはよく行く駅前だったが、祠の知る駅前の風景とは違っていた。

アスファルトはビルみたいに垂直に二本建っており、あとは自然災害でも起こったかのような荒れようだった。地面はスタボロになつており、ビルのドアは粉々に粉碎されている。

何の映画なんだろう、そう祠が考えている途中で画面がスーツを着た男性を映した。

そのままカメラワークが全体を映した。

軽く婉曲しているテープルがある。

何人か神妙な様子で座っていた。

全員見知った顔だった。ニュースで毎回見る顔だったからである。男性がドでかい液晶パネルを見ながらメモ帳を見るかのように事務的に言う。

「このような自然災害は絶対にありえません。監視カメラが全て潰

されていることから見ても明らかでしょう」

え？　思考がこんがらがる。

映画、だよね？

六十ほどの男性が祠に現実を見せようと思った訳でもないだろうが言う。

「もはや定番となつている質問ですが……昏倒事件、心消失事件とは何らかの関係があると思いますか？」

男性はまたまた事務的に言った。

「関係性がないとは言いい切れませんが、限りなく低いでしょう」
ですが、と言ってから。

「我々の手に負えないという点では共通しているかもしれませんが」
テレビから意識を切り離れた祠は心消失事件を思い出す。

そうだ。ニュースで見たあれだ。

意識昏倒事件は自らも関わったのでわかっている。

世界の全てがほぼ同時期に倒れた事件だ。

世界が壊れていく感覚に囚われた。

日常がどれほど危うい状況に立たされているのかを改めて実感する。

さつき男性に質問をしていた六十代程の男性が今までのののことを
忘れたかのような笑顔を浮かべる。

「さて次のニュースです。生命セフィロトの樹祭の準備に総勢一万人もの人々
が出店を出すそうです」

生命の樹祭——世界全部の主要な機関が以外は一切動かさず、ど
こにでも出店が出現する。

この地区——蒼頡そうけつでは生命の樹があるという特別な場所からか、
剥がれ落ちた巨大な木片を御輿のように担いで練り歩くという風習
がある。

更に夜九時には世界中で花火が百万発打ち上がるのだ。

男性の笑顔とその台詞で、ある願望が心の奥底で燦ぶった。

（先輩と祭りに出ればいいな）

いつも通りの願いだった。

シャルはあの名前も言わずに去っていったカッコつけ野郎のことを思い出していた。

「全部、ぶっ飛ばばいいな」

その言葉を思い出す。

（くそ！）

この世界にシャルは不要だ。

所詮、シャルはカルマの人形に過ぎない。

少しの労力でシャル程度ならば幾らでも量産できるだろう。

現にシャルは追われていない。

左腕を斬ってもいないし、戻ってきていないのに、だ。

所詮はその程度の存在。

放つておいても計画は進行するし、シャルが現代社会で生きるのは無理だ。

知りもしない左腕を斬るために生まれた存在。

出生届けも勿論出ていない。

出ていたとすればシャルは腹を抱えて笑っていた筈だ。

人形の俺に出生届けだと？ と。

「全部、ぶっ飛ばばいいな」

そう言つて拳を振るつたアイツをまた思い出す。

（俺が居る意味も、何もねえじゃねえか。何だよ俺って……なあ、クソツたれのカッコつけ野郎！ 俺の悩みはテメエの拳一つで解決出来るもんじゃねえんだよ！）

あと一歩で吼えそうになった所で伊沢波祠に質問された。

「シャルはあの事件について何か知ってるの？」

シャルは皮肉を込めて言い放った。

「ああ。人形なりにはな」

ロト地区でのお話

そこは家すらないゴミ捨て場のような場所だった。

いや、実際にここは世界最高のゴミ捨て場として機能していた。

大量の生まれながらにしての人生の脱落者とゴミと廃墟が並ぶ最悪な場所。

絶えず酷い異臭が広がっている。

血の匂い。

便の匂い。

泥臭い汗の匂い。

ゴミの匂い。

死体が腐った匂い。

様々な匂いが混じり合って最悪な匂いを作り上げている。

芸術と読んでいいかもしれない。

その異臭の中で人間は生きていた。

ボロ切れの布を身体に巻き付けて、赤ん坊を掻き抱いている虚ろな目の女が居る。

包丁を持った凶悪な顔をした大男が居る。

飢えを凌ぐために生ゴミを食べようとする子供が居る。

そんな最悪な場所、ロト地区のオシリス通りで歩いている二人の男たちの姿があった。

片方は身長百八十程で新緑よりも鮮やかなサラサラの髪を腰の辺りまで伸ばしている。瞳も緑で顔は意味不明な程に整っている。

男であっても見惚れそうだ。

金色のマントを無理矢理衣服にしたかのようなモノを身に纏っている。

もう一人は金髪を眉に掛かる程で切っている神々しい雰囲気纏っている男だ。

薄い青色の白衣を着ている。

二人の身ぐるみを剥がそうとしていたエヌルタとその仲間……十人が皆、何の合図もなく手を止め、立ち止まった。

なぜ？ と尋ねればそこに居た人たちはこう答えただろう。

緑の髪の男のせいだ、と。

世界の異物。

そこに存在しているだけで己の運命がねじ曲げられるような圧倒的な存在感。

なぜ存在している？ 疑問が心の底から溢れでる。

死人が生き返るよりもありえないことだと、全員は本能のまま思う。

そして、そんな男の横に何でもないように立っている男の存在もありえないと思った。

同時刻、チコモコアトル通り。

比較的安全な場所、即ち、人の多い場所で二人の男女がビニールテントを張って食事を配っていた。

二人の名前は伊沢波破魔と、伊沢波淡波^{あわなみ}である。

二人共三十代で、子供を生んだのが確か十八だ。

破魔は結婚十六周年目である。

破魔は隣の地区に置いてきた子供に思いを馳せてみた。

（うん。帰るときが楽しみな。仲間も一杯できたし）

阿波波は続々と詰め寄ってくる人の波に押され気味だ。

「アンタ！ 人の顔をニヤジロ見てないで手伝いなさいよ！」

阿波波の説教が飛んできて首を竦める。

「あいあい……つかニヤジロって何？」

破魔は針金みたいな身体をした女性に食事は差し出す。

女性は涙を流しながらお礼を言って食事を受け取り、近くの鉄骨の上に座って食べ始める。

涙と笑顔がそこにはあった。

食事と言っても簡素なパンと薄味のスープだ。

それだけであんなグシャグシャな泣き顔で、あの笑顔で食べ物を食べるのだ。

世界の理不尽さが身に染みてわかる。

喜びと悲しみでじんわりと心が熱くなった。

「私と娘以外にニヤジロするなあ！」

ゴカアン！ と破魔の頭にお玉が炸裂した。

見れば、嫉妬の炎を燃やしに燃やしている淡波さんが居る。

本当に珍しくこの地区に笑い声が溢れた。

「理不尽だ……」

言いながら、苦い思いが心の中に渦巻く。

政府に託された任務を遂行する必要がある。

同時刻、テオヤオムクイ広場。

通称ゴミ溜め場。

ここは世界から出たゴミを捨てて行く場所であり、ロト地区の人達にとって唯一飢えを凌げる場所でもあった。

電化製品が山のように積み上がり、残飯は今日を生きる糧となる。

そこで二人の少年が対峙した。

一人はめんどくさそうに耳を掻いているオレンジの髪をしたやる気の見れない男だ。

その男の頭に顎を載せているゴミみたいに汚い衣服を着た可愛い女の子が居る。

オレンジ髪の男と同じ服だ。

もう一人は好戦的とも冷静ともとれる冷やかでキツメの瞳が印象的な男。

その男はオレンジの髪の子を見て、喋り始めた。

「オレンジ。政府は何でここを放っている？ 流行病は必ずここが発信地なのにな？」

「うっせえなあ。俺は食いモン貰いに行くんだって。残飯は食い飽きた」

オラどけよ錬二、と掌をひらひら振る。

構わず錬二と呼ばれた男は演説染みた喋り方で言う。

「ここの戦力を恐れているからだ」

「世間の目が一番大きな要因だろうが」

錬二はまたもや無視して言う。

「ここは犯罪者や、親がここに住んで居たためにここに住むしかない人達が揃っている。約十万人。今年はここに逃げ込んだ犯罪者が五十人は居るらしい」

「それがどうしたんだよ。お前は浮気に気づいた回りくどい主婦だよ。サツサと要件を言ってくんねえかな。コイツが顎でぐりぐりしてくるんだけど」

錬二はオレンジの興味が微塵もない態度にはあ、と溜息を吐く。

「ここに居る連中は多かれ少なかれ何の対策もしない政府やのうのと暮らしている世界に恨みを抱いてる」

オレンジは何かに感づいたかのように表情を変える。

「お前、世界にケンカを売るつもりか？」

「ああ」

短く言い切った。

この前から必死で演説していたのは知っていたがこんなことを計画していたとは、バカバカしい。

ハッとオレンジは鼻で笑う。

「出来る訳ねえだろ」

「出来るさ。お前と俺が居ればな」

一切迷いがない瞳のまま言い切る錬二。

確かに不満がないと言えは嘘になる。

残飯は不味いし日々の生活も飢えとの戦いだ。

だけど、オレンジは錬二と一緒に戦うなんて選択肢は存在しなかった。

唐突に錬二は真下にあった携帯電話を踏み砕いた。

「いや、蹴り砕く必要はなかったか」

忘れていることに恥じたような声を出す。

次の瞬間。

世界が変わったかのような感覚に囚われた。

（俺と同じ進化しやがったのか……？）

オレンジは少しだけ感慨深いモノを感じた。

驚きはしなかった。

俺が進化したのだからコイツが進化してもおかしくはないと思う。

携帯電話は勝手にバラバラになり、やがて小さく固めた金携帯電話

電話から現れた。

錬二はそれを拾いながら一言。

「驚いたか？」

「べつつにー」

二人は同時に言い放った。

人工(？) 天災

世界の危機に政府が下した対策は取りあえず調べるといったモノだった。

魔力濃度。指紋。その他諸々。

何一つとして証拠が上がらなかった。

もともと人がなした所行とも思えない政府や警察、科学者達は、どうしようもないという酷く投げやりな感じで調査を続けていた。しかし、カルマⅡモレクスならもしかしたらどうにか打破できるかもしれない、そう考え直した政府は二人の使者をカルマⅡモレクスに送り出した。

場所は第五研究所。

男と女がそこに立っていた。

男、エア・アテアは四十代でくすんだ金髪を綺麗に刈り上げている。

重要な役職に就いている使者として十分過ぎる人物だ。

女イシユタル・マヤウエルは二十代で瞳は大きく適度に潤んでおり、とても綺麗な外見をしている。

胸も大きく、くびれもある。

こんな重大な使者に任命されるような歳ではない。

それもその筈、彼女は外見だけで選ばれた使者だからだ。

男なら綺麗な女に微笑まれば嫌な気分にはさせまい、という政府の考えから選出されたのである。

マヤウエルは緊張しているのか、汗でベタベタしている掌をハンカチで拭いていた。

アテアも、勿論緊張していた。

手土産が入っている紙袋を持つ所が滲み出る汗で濡れていた。心臓が大きく跳ねる。

もしも、手土産が気に入らなかったら？

何か失言があつた場合はどうする？

混乱に混乱を極めた心のまま直立不動で第五研究所前に立っている姿は酷く滑稽だ。

途方もなく大きな研究所で、壁に設置された階段や今時ない煙突などがあり、工場のような外見をしている。

周りは森に囲まれていて、空気が清々しい。

大きな門から出てきたのは新緑よりも美しい緑の髪を腰の辺りまで伸ばしている男だった。

ぞわりと違和感が背中から這い上がって、動揺を生んだ。

四十年生きてきて培った常識が通用しないと本能が叫んだ。

何だアレは……？

男が歩いてくる。

ジワリと汗が吹き出してくる。

『逃げないと水分を枯渇させて殺す』

そんな錯覚が生まれた。

男の周囲の空間が逃げるようにねじ曲がっているのが見えた気がする。

錯覚だ！

その一言で常識が盛り返してきたのを感じた。

（そうだ。科学で証明できないことはない。あの男もなにかのトリックに決まってる。そうだトリックだ）

自分に言い聞かせるように心の中で呟く。

それだけで湯水のように常識が吹き出てくるのを感じる。

（そうだ。あの研究所はあのカルマの研究所だ。なにが起きたっておかしくない）

そこまで考えて精神が安定してきた。

なぜあんな考えが浮かんできたんだ？ と過去の自分を馬鹿にさ
えできる。

男は道ばたの石ころを眺めるような視線でアテアとマヤを見る。どう鼻屑目に見ても応対する者の態度ではない。

それとマヤがほんのり顔を赤らめているのが気に食わなかった。まあ、こっちは完全に嫉妬なんだから。

よく見れば汗でベツトリとしている。今さっきの自分と同じ感覚を味わったのだろうか？

アテアは頭を下げて挨拶してから要件を言った。

「カルマⅡモレクスさんに今回は折り入ってお願いが」

そのまま、緑の髪の男は自分を素通りした。

瞬間、自分を形作るモノ全てにぞつと悪寒が走った。

心も体も、その全てが悲鳴を上げる。

恐怖も、疑問も存在することすら許されなかった。

心の許容量限界まで意味の分からない力で覆い尽くされ、身体のがんがれが死んだ。感覚が死んだ。

緑の髪の男はほう、と興味深げに顎を触りながら二人を見る。

「コレくらいの負荷にも耐えられんのか。この世界の連中は……なるほど。アイツの言い分ももつともだ」

ゆつくりと、地面を踏んだ。

男は消えていた。

種も仕掛けなかった。ただ地面を踏んだだけ。

それだけで消え去った。

直後。

衝撃波で二人の使いが居た場所、半径五キロメートルが巨大な爆弾を落とされたかのように吹き飛んだ。

世界中に伝播した衝撃波は窓ガラスを割り、扉を歪め、海を震わせ、人を冗談みたいに吹き飛ばした。

世界にまたもや不思議を生みだした。

森の木々は跡方もなくなり、研究所は廃墟と化していた。

鉄骨が無様に折れ曲がり、研究所の象徴のような煙突は影も形も

なかった。

何かよく分からない液体が研究所から大量に漏れだしている。

そんな爆心地のように荒れた土地に一つの闇があった。

闇は溶けるように消えると、女性と男が青年、暗闇一縷に抱きついてきた。

一縷は気にせず言う。

「オイオイ。天災みたいな奴だな」

一縷の横に立っていたアルテミスは現実味のなさそうな表情で茫然としていた。

一縷は周りを見渡す。

焼き野原という表現がピッタリな荒れようだった。

男は一縷から離れて涙溢れる瞳を拭いながら嗚咽を漏らす。

女は泣きじゃくり、一縷の脚に安心を求めて更に強く擦り寄った。
(行かないでお前さん、五月蠅い黙れえ！　みたいな応酬を試みたいな)

一縷はそんな馬鹿丸出しの考えを抱きながらようやく二人に顔を合わせて、

「にしても、間に合ってよかったな。おたく達。危うく死ぬところだったぞ？」

男がその言葉でようやく使命を思い出したかのようにハッとした表情になった。

涙でグシャグシャになった顔で一縷に早口に問う。

「カルマさんの研究所で何をしていたんですか？」

男は立ち直りが速いのか、はたまた狂いそうになる精神を会話で必死に繋ぎ止めているのか。

一縷がそう考えながら、

「カルマの研究所巡りだよ。俺らの能力を解除する方法を探してる。全く見つかってないんだが」

ようやく復活したアルテミスは一縷を肘で突く。

「そんなこと言わなくても」

一縷はきよんととして、

「別に言っても構わないだろ」
と返した。

アルテミスは不満を目一杯に表す表情で言う。

「そんなこと話して余計な首でも突っ込まれたら……」

「なら、あの、あ……………」

何を思い出したのか、男は顔を青白くして胃の中のモノを思いっ切り吐いた。

どこに？ 一縷の脚に。

「うおっ！ 何か虫出てきたー！」

かくして、青白い顔して吐き続ける男とゲロまみれのジーパンを履いている青年に抱きついて泣きじゃくる女と、それらに対して冷ややかな目線を送りつつ、女を青年から引き剥がそうとする少女（後期）という個性溢れるパーティでアルテミスの家を目指すのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5104o/>

世界を廻すモノ

2011年3月12日09時40分発行